[De POLA] 地方と都市を結ぶホットライン・マガジン

でぽら

9

'95秋冬号

特集 "湯の里" 新・魅力づくり

DePOLA No.9

でぽら●もくじ

特集 "湯の里"新・魅力づくり

日本人は無類の風呂好き。近年の旅行ブーム、自然・ふるさと志向、健康への関心を反映して、各地の温泉地が人気を呼んでいる。自治体も新たな温泉源の開発や温泉施設の充実に力を入れており、魅力ある温泉が目白押し。今回はちょっと肩をほぐして温泉ガイド特集。

❶人気の温泉地——ここが違う

- 美しい自然と暮らしを守る。年間355万人が訪れる湯布院がめざすもの（大分県湯布院町）——7
- 温泉で町を活性化する「お湯〜とぴあ構想」（岩手県湯田町）——9
- 5年連続利用率全国1位 国民宿舎「鵜の岬」（茨城県十王町）—12
- 温泉開発が奥地の村に風穴をあけた 両神温泉（埼玉県両神村）——14

❷温泉プラスアルファの魅力

- 温暖な気候と温泉、山海の幸を生かした花とフルーツの里（静岡県南伊豆町）——16
- 村の産品を盛り込んでリッチに。村営レストラン「聖レイクサイド館」（長野県麻績村）——18
- 大自然をひとりじめ！秘境秋山郷で露天風呂を体験（長野県栄村）——20
- 世界で唯一、サルの温泉で町おこし 渋温泉（長野県山ノ内町）——22

[私と温泉]ブナ林で目覚め、里へ降りて一番風呂（館英和）24

ローカル線に乗って「お湯めぐり」（三浦春紀）27

■エッセイ

まずは下駄をひっかけ共同浴場へ

鎌田 慧—3

■カラールポ

スポーツ感覚で温泉を楽しむ

KURHAUS——36

●都市からふるさとへのメッセージ

都市に"ふるさと"のアンテナショップを

熊本県、鹿児島県、沖縄県の新たな試み——30

INFORMATION—34

温泉あ・ら・か・る・と

●表紙写真

（下）秋山郷（長野県栄村）のよさの里「牧之の宿」の露天風呂とそこで働く若者たち。鳥甲山を望む大自然郷。

（上）渋温泉（長野県山ノ内町）地獄谷の野天風呂で入浴を楽しむ猿たち。

（カメラ／小林恵）

「でぽら」(DePOLA)とは——

Depopulated Local Authorities（人口が少ない地域）、つまり過疎地域の意味。わが国の過疎市町村は37%にも達しています。貴重な自然環境と農産物の供給地であり、日本の伝統文化や風土を伝承してきた農山村の活性化と発展をめざすための交流誌として『でぽら』をお届けいたします。回覧し、多数の方にご高覧いただければ幸いです。

まずは下駄をひっかけ共同浴場へ

ルポルタージュ作家
鎌田 慧

僕はお百姓さんとか漁師さんとか、辺鄙な地方で、大地にどっしり根を張って生きているひとびとが好きで、全国各地をぐるぐる取材して歩いている。当然温泉好きで、そこに温泉があれば、必ず入るのを楽しみにしている。僕は地元の人がよく利用する共同浴場が大好きで、宿をとってから、下駄をひっかけ、入りに行くことが多い。

僕が生まれ育ったのは青森県弘前市。子どもの頃はおでき、今風にいうアトピー体質だったので、母がよく大鰐温泉へ連れていってくれた。弘前から9キロほど離れており、硫黄分の強い温泉である。小さい子どもは体温が高いせいか、お湯が熱くて入るのが嫌だったものである。

中学生、高校生の頃になると、友達と自転車に乗って、岩木山の麓にある嶽温泉の共同風呂へよく行った。高原を越えていく温泉で、冬になると、農家の人々が長期間の湯治にきていた。木の湯舟のひなびた温泉で、学生のとき、アルバイト先で事故を起こして、湯治に行ったこともある。やはり、硫黄分が強くゆで卵のような匂いのするお湯である。

だから、温泉というと白濁した硫黄のお湯というイメージがあるが、いまは、温泉であればよく、成分や効能などは殆ど気にならない。

しかし、いくらいい温泉といわれても、コンクリートのビルが林立している温泉地はあまり好きではない。仕事柄、有名な温泉地のホテルや旅館の豪華風呂にも入ったりするが、

屋久島・海中温泉（写真／鹿児島県屋久島事務所・内村秀樹）

しみじみ記憶に残っているものは少ない。

印象に強くあるのは、屋久島の海中温泉である。海岸にお湯が湧き出ているのだが、満潮の時は海水で覆われている。干潮になり、海水が引いたあとポッカリ温泉が顔を出す。

夕方入ったあと、夜中にもう一度入りたいと浴衣掛けで出かけてみた。

岩場を5分ほど歩くと岩と岩の間から温泉が湧いている場所に出る。周辺は原生の森で真っ暗なうえに、岩場の岩が奇岩で、その上、押し寄せる波の音が轟きこだまし、さすがの温泉好きも、立ち竦んで、入浴せずに引き返したものだ。

温泉に浸かりながら海や沈む夕日を眺めるのは最高の贅沢だ。最近では津軽半島黄金崎の不老不死温泉（青森県深浦町）が大いに気に入った。

旅館から6、7分の海岸波打ち際に露天風呂がある。ここのお湯に浸かって眺めた日本海の落日は言葉に尽くせない。

下北半島の風間浦村には下風呂温泉があり、海岸にへばりつくように数軒の鄙びた旅館がある。本州最北端の温泉に浸かり、荒れすさぶ津軽海峡を眺めるのもいい。

浅虫温泉は青森市に近く、昔から利用者の多い有名な温泉地だが、意外と静かで落ちついた雰囲気がある。陸奥湾の静かな入江の景色を眺めながら、のんびりお湯に浸かることが出来る。

伊豆半島は温泉観光地のメッカだが、そこで、長い間唯一温泉がない村が西伊豆海岸の戸田村だった。

しかし、近年ボーリングに成功し、戸田村にも村営の温泉が作られた。

村では温泉による観光化は考えておらず、民宿や町民たちは、ここからクルマでタンクに積んで運び、利用できるようにしている。

僕はこの村の海辺の民宿に逗留して原稿を書くことが多く、毎日散歩がてら15分程の道のりを歩いて共同浴場に通った。

一週間ほど、一日に、二度三度と入浴しているうちに、そのころ机に向かうのも苦痛だった五十肩がすっかり消えてしまったのには驚いた。

雲仙普賢岳の大噴火以来、僕は4年間続け

▲日本海を眼下に望む露天風呂。写真は最近オープンした「ウエスパ椿山」の開閉式露天風呂。西欧風のコテージも完備している。（青森県深浦町役場☎0173- 74-2111）

て島原半島に通い、普賢岳の南側の海岸沿いにある島原温泉のひとつを定宿にして、火山被害の実態を取材してきた。

ここで噴煙を眺めるたびに、人は直接的に火山の被害を受けることもあるが、温泉という恵みも受けていることをしみじみ感じた。

問題は自然への人間のかかわり方である。「自然が未だ残っている」などという傲慢な言葉が横行する時代のことである。自然を屈伏しようという意識のことである。

思うに、僕は仕事がてら、温泉治療をしているのではないか。熱すぎて嫌いだったお湯はアトピーを治してくれたし、五十肩の鈍痛も楽にしてくれた。医療的には温泉の質には適応症も、禁忌症もあるわけであろうが、さまざまな温泉に入るうちに、さまざまな気がつかない疾患をなおしてくれているのではないかと思う。

ともすればメカニズムの歯車になりがちな現代人にとって、もし何かの病いを治そうとするなら、まず温泉に行って、裸になって、ゆっくり、つかって、それから、という思いが沸いてくる。

効能、効果すら忘れてである。

写真／小林 傳

特集 "湯の里"新・魅力づくり

◆1 人気の温泉地——ここが違う

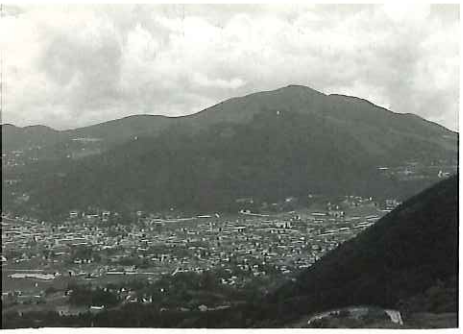
鵜の岬国民宿舎

両神温泉「薬師の湯」

湯布院町「クアージュゆふいん」

国民宿舎「鵜の岬」の献立

湯田町「砂ゆっこ」



▲湯布院の町並み
▶観光地の喧騒がない落付いたゆふいん駅

人気の温泉地――ここが違う①

美しい自然と暮らしを守る 年間355万人が訪れる湯布院がめざすもの

（大分県湯布院町）

別府から車で30分。城島高原を抜けると眼下に由布院盆地が広がる。大きなリゾートホテルもなければ、派手な看板もない。全国的に高い人気を誇り、年間355万人の観光客（うち宿泊82万人）が訪れる温泉地とは思えない静かな佇まいだ。緑のなかに民家が点在し、そこではあたかも人びとの暮らしがもう幾世紀も変わらず続いているかのような印象を受ける。

映画祭や音楽祭、牛喰い絶叫大会など、住民による町おこしの先駆的な存在としてあまりにも有名な湯布院、今回はその第一線で活躍してきた観光協会顧問であり、旅館「玉の湯」の主人溝口薫平氏に話を伺った。

旅館は地域における「情報センター」である

「これまでの30年間を振り返れば、町おこしをやって来たというより、住民たちの心おこしをしてきたという感じですね。情報センターを旅館において、都会からやって来る人の意見にきっちり耳を傾けた。湯布院が湯布院として認められ、観光客の数が増えるにしたがい、より多くの意見、感性が入ってくる。これが私たちにとっての貴重な情報だった」

年表をみても分かるとおり、湯布院の町おこしの歴史は長い。ダム建設問題からはじまって、ゴルフ場建設、サファリパーク誘致など、経済発展に伴う社会の動きにたえず疑問符を打ち続けてきた。まさに人々の心が守った緑の大地である。

住民が町おこしに参画したそもそもの発端は、昭和27年半ばに持ち上がった由布院盆地ダム計画だった。電力を供給し、人造湖を資源とする観光地にしようというもの。計画では盆地のほとんどが水没し、そのかわりに膨大な補償金も支払われることになっていた。だが青年団や農業団体が中心に住民たちによる反対運動が活発化し、結果として盆地を守ることになったのである。

それからは温泉地としての模索がはじまった。昭和40年代、高度経済成長を迎え、ここで「観光軍団」として表舞台に飛び出したのが、溝口氏や中谷健太郎氏といった二代目の旅館経営者たちだったのである。

「当時は賑うことがすべての温泉地にとっての価値だった。隣の別府温泉はまさに一大歓楽地、お客が大量輸送されて来て、金と一緒にゴミを置いて帰る。だから湯布院はまずどういう方向を目指すかをかなり真剣に話し合った。とにかく自然志向でいこうという考え

観光協会顧問溝口氏（「玉の湯」主人）

にまとまったんだけど、当時は文化でメシが食えるかという意見が多くて、私たちの試みはなかなか認知されなかった」

経済の尺度、地域の収入という尺度を捨て、日常の豊かさと空間の豊かさを表現していく。今でこそ価値観が変わったものの、その当時の社会状況からすれば、この考え方はまさに先見の明であった。

「バブルの頃に生まれたハウステンボスは、単に金をかけてはいるが、ひとときは楽しめても、緊張から解き放たれて心底のんびりすることはできないのでは。湯布院は長い時間をかけて生み出した静けさと暮らしがあります。ここには自分たちの手で築き上げた生活があって、それが町全体の優しさにつながっているんです」

公衆浴場「下ん湯」でくつろぐ町民

美術館などが大変多い

心身だけではなく、町全体に温泉の潤いを

温泉湧出量全国第3位を誇る湯布院。単に観光地として賑わうだけでなく、この資源のもつ意味をもっと広く生活に浸透させようという試みが始まっている。クアオルト（保養温泉地）構想とよばれ、その中心となる施設がクアハウスだ。

ここ四、五年のあいだに全国各地の市町村に広まったクアハウスだが、湯布院に建設の話が持ち上がったのは80年代も前半のことだった。81年に環境庁の国民保健温泉保養地の指定を受けたことから、町の新たな目玉としてクアハウスが選ばれたのだ。

そもそも「温泉保養施設」の発想を町に持ち込んだのは、溝口さんら二代目旅館主の三人組。ヨーロッパの視察旅行で温泉のさまざまな形を見てきた彼らは、観光のためではなく、治療や静養のための長期滞在という発想に大きく影響を受けた。彼らの意見を受け、町も「クアオルト構想」を打ち出して委員会を発足させた。温泉を中心に公園や宿泊施設、そして美術館やギャラリーが点在する潤いのある町。

もちろんクアハウスの施設には、たえず景観とのバランスが考慮された。

町の中に9階建てのホテル建設の話が持ち上がった時は、それは湯布院の景観がぶち壊しになると溝口さんらは一年かけて話し合ったという。

90年4月、ついに健康温泉館「クアージュゆふいん」が完成。1万1000㎡の敷地には、温泉棟をはじめレストランや研修棟が並ぶ。敷地内には緑地も多く、ごく自然に町並みに溶け込んでいる。

30年来の夢を実現させたとはいえ、溝口さんの語り口は厳しい。

「日本のクアハウスは経営的にどこも苦戦しているようです。やはり風土や習慣のちがいで、日本の温泉地にヨーロッパのスタイルをそのまま持ち込んでもなかなかしっくりこない。だいたい長期療養といっても、保養地でのんびりできるほどの休暇制度が日本にはまだ少ないですからね」

「クアージュゆふいん」の利用客は当初の見込みを下回っている。今後はさまざまなイベントとの連携を図りながら、湯布院の観光ポイントとして、また住民の健康づくりの場として発展させていきたいというのが溝口さんの考えだ。これは、全国のクアハウスに対して何らかの効果をもたらすかもしれない。

湯布院町・町おこしの主な歩み

昭和27年	由布院盆地ダム化問題で、地元青年団による反対運動開始
昭和30年2月	由布院町と湯平村合併
昭和31年1月	陸上自衛隊湯布院駐屯地開設
昭和34年5月	国民保養温泉地に指定
昭和39年10月	九州横断（別府阿蘇）道路が全線開通
昭和45年	ゴルフ場建設計画起こる 住民による「湯布院の自然を守る会」発足
昭和46年3月	「守る会」が「明日の湯布院を考える会」に名称変更
6月	有志によるヨーロッパ保養地の視察
昭和46年	ゴルフ場建設計画持ち上がる、反対運動も活発化
昭和47年	「牛一頭牧場運動」開始
昭和50年4月	大分中部直下型地震発生、町の被害総額50億円
7月	町にはじめて辻馬車開始
8月	第一回ゆふいん音楽祭
10月	第一回牛喰い絶叫大会開催
昭和51年8月	第一回湯布院映画祭
昭和56年	環境庁より国民保健温泉地に指定
平成6年6月	九州横断道路無料化（開通30年）

心使いが嬉しいお湯のサービス

地元穫れたての野菜を売る店

町内には民芸館、

自然が最強の観光資源
農業との共存を課題に

温泉観光地として町おこしの先陣を切ってきた湯布院。中心となって活躍してきた旅館経営者たちは、現在「市場（バザール）のある温泉リゾート」構想をすすめている最中だ。これは三つの柱からなっている。

まずは観光魅力の分散化・多様化。これは町の魅力を旅館だけでなく周辺地域へ拡散させるという試みだ。昭和30年の合併以来、人口は1万2000人前後を推移しているが、中心部への人口集中化現象が起き、町の周辺部では過疎が進んでいるのが現状。風呂や売店、喫茶をはじめとする旅館スペースを地域に開放したり、さまざまなイベントに対応できるような共有のパブリックスペースを設けたりする。

つぎは競争ではなく共生をめざし、旅館同士の情報交換を活発に行うこと。旅館一軒という単位ではなく、そこを拠点としてあるいは連携させて町全体の活性化を図ろうという試みである。また、外の情報をたえず受け入れるため、研修旅行なども積極的に行っていく方針だ。

三つ目は農地をはじめ環境・景観を最強の観光資源とするというもの。

「今後の課題と言ったら、引き続き自然や景観を保護していくことですね。ただ単に建物を規制するというのではなくて、もっと積極的に農園の維持に取り組んでいきたい。観光業の割合が7割を超えたとはいえ、やはり農業なくして湯布院は成り立たない。これは景観を保つためのでもあり、外から訪れるお客さまの安らぎのためでもあるんです」

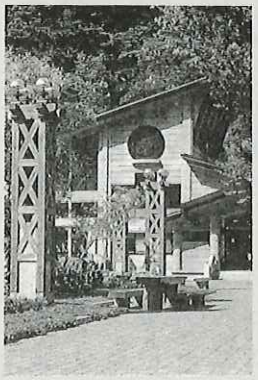
現在、農家と旅館が個別に契約を結び、農作物を売買する「自然（じねん）の会」が運営されている。景観を守ることで、結果として農業を守り、安全で新鮮な食べ物を観光客に提供できるというシステムだ。

「つぎの世代を考える時、やはり重要なのは教育の問題です。こうして湯布院が全国的に有名になり、町の若者も自分たちの故郷に誇りをもつようになった。でも世代はどんどん移っていくものです。これからも子どもたちがこの美しさに気づき守ってくれるよう、それぞれに確かな原風景の記憶をつくってほしいですね」

憧れの温泉地としてどこか高級なイメージがあった湯布院だが、訪ねてみれば、そこは美しい自然と、人々のくらしが変わらず続いている豊かな故郷だった。

（浅井四葉）

温泉を全戸配湯し、滞在型休養村へ—福島県檜枝岐村



人口わずか650人程の檜枝岐村には古い歴史を持つ農民芸能や山人（やまと）料理など素朴で特色ある文化が多く、観光地としても人気上昇中。

檜枝岐村の本格的な観光地化は昭和48年の温泉堀削。谷沿いに村落が集中していることから、温泉は村内全戸へ配湯することが可能となり、民宿や旅館経営に転じる民家が増えた。62年には新たに良質の湯脈も発堀され、一般家庭、旅館・民宿、2つの村営公営浴場に配湯してもまだ余裕があった。

そこで、豊富なお湯の活用と、村の活性化、イメージアップをはかるため、4年前に開設したのが「森の温泉館・アルザ尾瀬の郷」。福島県側だけで年間45万人を超える尾瀬への入山者やスキー客を対象にした宿泊できるクアハウス的施設で、年間6万5000人が宿泊し、90%が村外者。それに伴い、Uターンする若者も増え、秘境は滞在型温泉村として活気を呈しつつある。

湯本温泉地区の自主グループにより土用丑の日に行われる「湯本鬼剣舞」

人気の温泉地――ここが違う②

温泉で町を活性化する［お湯～とぴあ構想］（岩手県湯田町）

岩手県湯田町は、県の西端に位置し、北上市と秋田県横手市を結ぶJR北上線のほぼ中央に位置している。総面積304・56㎢のうち、92%が山林原野。農耕面積はわずか2%に過ぎず、しかも東北有数の豪雪地帯である。

かつて、湯田町は銅を中心とした鉱山の町として栄え、人口1万3000人を数えたこともあったが、鉱山は昭和40年代にすべて閉山。しかも、ダム建設による水没などで、60年には人口が5000人にまで急減した。過疎化とともに訪れた急激な高齢化。その危機感のなか、町が活性化策として打ち出したのが、「お湯～とぴあ構想」である。

町内7ブロックごとに温泉を活用した地域振興

「お湯～とぴあ構想」とは、温泉（地熱）を多目的に活用した開発構想のこと。湯田町は、湯本・湯川の古くからの温泉のほか、近年掘削した温泉もいくつかある。そこで、町内を7ブロックにゾーニングし、まず、それぞれのブロックに温泉があるようにしよう、というもの。温泉のない地区では、町が新たにボーリングすることとした。そして、生まれた温泉を、観光や民生、産業振興に活かしていこうという構想である。

その、目に見える成果として第一に登場したのが温泉駅「ほっとゆだ」（当時は陸中川尻駅）である。平成元年4月にオープンしたこの温泉駅は、ユニークな駅舎として評判を呼び、ちょうど国鉄からJRへと衣替えした時期ということもあって、マスコミにもたびたび登場するようになった。それまで、駅ホームに温泉を備える上諏訪駅はあったものの、本格的な温泉を併設した駅舎は初めて。当然JRとの話し合いも難航。県の理解もなかなか得られなかったが、再三の陳情と、JR盛岡支社のトップの判断で、ようやく実ったという。今では「ほっとゆだ」は湯田町だけでなく、北上線の看板ともなって、多くの観光客を集めている。

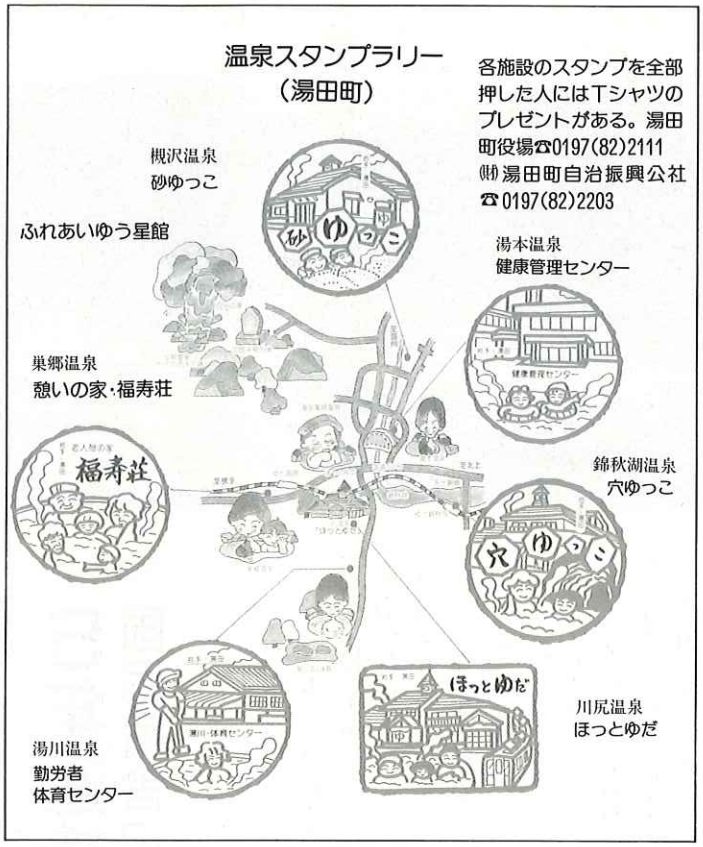
その後も町では、東北では初めてという砂湯のある「砂ゆっこ」、洞窟風呂のある「穴ゆっこ」、産直による都市住民との交流が行われている「ふれあいゆう星館」など数々の温泉を整備。今では、ブロック全部に温泉が湧いている。

まず住民のために小規模な公衆浴場を

湯田町の温泉づくりの特徴は、各地区に150円という低料金で入浴できる公衆浴場を設置していること。「ほっとゆだ」や「砂ゆっこ」（砂湯は別料金）等もこうした施設である。

ただ、こうした施設は、さほど収容力のある施設ではなく、たとえば観光バスで団体客が立ち寄れるようなものではない。温泉というと、即観光というイメージがあるため、町民などの中には、もっと大きな施設、たとえば日本一の露天風呂のようなものを造ったほうが効果があるのではないか、という批判は今も根強いという。

しかし、町の考え方は、「住民が自信や誇り、愛着を持てるところにこそ、



ほっとゆだ駅

お客さんが来る」というものだった。住民は恩恵をこうむらず、客だけが恩恵をこうむるような地域は本当の観光地ではない。

そこで、小さいけれども、利用率の高い施設を造ろう、というのが「お湯～とぴあ構想」の考え方だった。

町民にまず温泉に入ってもらって、「いい湯だな」と感じてほしい。外部からの客に温泉を勧めるにしても、自分たちが満足していれば、それだけ心のこもったサービスで接することができる。

また、公衆浴場といっても、それぞれ少しずつ趣きを変えている。そのせいで、次はどこに行こうという楽しみが生まれる。7施設をめぐる「スタンプラリー」も好評で、現在、これらの公衆浴場には、年間40万人もの人が訪れている。

町が標榜しているのは、「スモール・イズ・ビューティフル」という言葉。実は、「お湯～とぴあ構想」は、コンサルタントや中央資本に依存せず、自分たちで自分の町の個性を発見し、それにこだわりながら事業を進めている。それが、小さな施設に輝きをもたらしている。

ハード優先で、やたらと大きな施設を造る傾向がまだ少なくない今、湯田町のこの施設には好感が持てる。

温泉付き宅地分譲計画も 温泉を活かして人口定住へ

「ほっとゆだ」をはじめとする施設の運営は、町の委託を受けた自治振興公社が行っている。施設の中には、温泉プールや温泉つきの体育館などもある。

また、「ほっとゆだ」のすぐ近くにある「悠々館」も特色のある施設だ。これは、冬期間に、独り暮らしの高齢者、もしくは高齢者のみの世帯の希望者が移り住む集合住宅である。湯田町は豪雪地帯のため、雪下ろし等は高齢者にとってたいへんな作業だ。高齢者が悠々館で暮らしている間、その家はボランティアによって管理される。悠々館には社会福祉協議会の事務局が同居しており、もちろん温泉もある。このため、高齢者は冬の間安心して暮らすことができるというわけだ。

このように民生面・観光面では順調に展開している「お湯～とぴあ構想」だが、課題は産業面だという。現在、山菜や花卉栽培などの農業面での活用、スッポンの養殖などが行われているが、町の評価は「まだまだ」ということだ。

町では、将来へ向けての展望として、交流人口の拡大、企業の育成とともに、定住の促進をうたっている。温泉付き宅地分譲による北上地方の若者のIターン促進もにらんでいる。町の担当者は、「これもお湯～とぴあ構想のひとつなんですよ」と笑うが、もし実現すれば、過疎地のユニークな人口定住策となる。

自らの持つ温泉という資源にこだわり、活性化を図る湯田町。それは、「たまたま温泉があった」からでなく、「たまたま温泉が資源だった」という方が正しいだろう。どの町にも必ず何か資源があるはずである。それをどう活かすかが、その町の活性化への課題となるのであろう。

杉本治人（月刊「晨」編集局）

人気の温泉地――ここが違う③

5年連続利用率全国1位

国民宿舎「鵜の岬」（茨城県十王町）

茨城県立国民宿舎「鵜の岬」は、昨年も利用率90％を越え、5年連続全国1位の利用率を誇っている。

私たちが訪ねた日は7月の平日、連日雨模様で、とくに関東の太平洋岸は大雨注意報が出ていたが、「鵜の岬」の宿泊者はキャンセル・ゼロ。「やっと念願かなって宿がとれたんですから、何があっても来ました」と言って訪れた客で賑わっている。

この〝利用率〟の計算方法は、国民宿舎の場合、各部屋の定員は一人当たり2畳と決められている。したがって8畳の部屋に4人が泊まれば100％だが、2人だと50％、3人だと75％になってしまう。

いくら客が多くても相部屋にはできないし定員オーバーで泊めることもまずないから、利用率90％を上回るということは実に大変なことで、「鵜の岬」の場合、一年中いつも満員ということである。

茨城県開発公社から派遣されて「鵜の岬」の副支配人兼管理課長を勤める小池雅夫さんは、「国民宿舎には結構いろいろな規制があります。もし空部屋があっても予約のないフリー客は泊めない、温泉だけの利用もダメです。せっかく申込んでくれた方が急にキャンセルしないよう、早めに何度か連絡を取って確めること、研修棟を中心に団体さんを受入れて利用率を高める等の工夫をしています」

予約は、夏休みと年末年始の特定期間を除いて3カ月前から電話で受付けているが、月始めの1日は午前8時30分から電話が鳴りっぱなし。5本増設し5人の職員が対応するが、それでもさばけないほどで、「予約がとれるのは奇跡」とまでいわれている。夏休み等の特定期間は往復ハガキによる抽選で予約するようにしているが、連日「何とかならないか」という電話が鳴りっぱなしだ。

実は私も以前からこの人気の宿に何とか宿泊したいと数回申し込み、やっと念願を果した一人なのだが、対応のしかたがよく、「ダメでもともと、予約が取れるまで挑戦しよう」という気持ちにさせられたものである。

夏で1万2000通、冬で6000通のハガキの申込みがあるという人気ぶりを、小池さんは「嬉しいことですが、異常事態です。来ていただいた方に満足してもらうよう、かなり神経を使うことにもなりますし」と語る。

小池副支配人

利用者は、トップが埼玉県、続いて東京都、千葉、茨城県で、都心からのアクセスの良さも人気のようだ。

昭和46年に開設したこの施設、定員は124人だが、現在平成9年4月開設をめざして新館を建設中。8階建てで定員は230人というから、少しは利用しやすくなるに違いない。

限られた範囲で最大のサービスを

「鵜の岬」は茨城県の北端に位置する

太平洋に面した県立自然公園の中にある。15・5㌶という広大な松林と美しい白砂。白砂の先きは断崖絶壁のダイナミックな景勝地で、海鵜が飛来するところでも知られる貴重な自然郷。

このロケーションが同宿舎のまず第一の魅力で、部屋や展望風呂からは白砂青松が望める。

施設は46年開設であるため、最近作られるホテルや宿舎等に比べるとロビーもささやか、トイレは共同と、特に優れているわけではないが、何度も改修を行いながら快適空間づくりに努力してきた。今となれば、アットホームで親しみやすい雰囲気が、かえって和ごませてくれるのかもしれない。

白砂の先きは海鵜が飛来してくる断崖

温泉は、当初はわかし湯だったが、ボーリングに成功。そのため展望風呂と研修室、会議室のある別棟を作り、風呂はサウナ、ラドン、森林浴室を兼ねた小ざっぱりした作りとなっている。

もう一つの魅力は、何といっても宿泊料金の安さ。大人一人が2食付、入浴税・消費税込みで一泊6639円。会議等で団体客が大広間等を使って宿泊する場合はさらに安い。

定食に活造り（3000円）を加えて……。

しかも料理がおいしくて気がきいている。皿数が多い見た目の豪華よりも実質を重んじた献立で、有田焼の器を使い、熱いものは熱い時に食べる等の工夫をしている。定食は5品（基本料金）の他9品までの3コースがあり、手頃な価格で海の幸の特別料理も注文できる。部屋には電気ポットと上質の緑茶がたっぷり用意してあり、お茶の旨さもなかなかであった。

「限られた範囲で最大のサービスをしよう、それが料理でした。原価ぎりぎりまでいい材料を使うよう料理長らががんばっています」

サービスの良さ、きめ細やかさについてはフロントの女性の対応のしかたにも現われている。来客の荷物を持ってエレベータまで案内するといった何気ない心配りが嬉しい。また、ここでは布団の上げ下ろしも全部宿がやってくれる。

職員は41人、他に掃除や布団敷き等のパートさんが30名とかなりの数。若い職員は県内から募集し、寮生活を送りながら接客について学んでいくが、「みんなでアイデアを出し合い、一人ひとりができる範囲でサービスに力を入れていこうと努力しています」と小池課長。

小池課長は地元十王町の出身で、国民宿舎と地域との橋わたし役も担ってきた。

「宿泊に関しては地元優先は一切できませんが、昼食会や研修会等の便宜をはかっています。11月23日には地元への還元と交流の場として宿舎が主催して『秋まつり』を開催しています。浜辺や松林でゲームや青空市、磯料理サービスなどをして子供やお年寄りに一日楽しんでもらっています」

売店では地元で作った和菓子や漬物、海産物を売っているが、特に十王町の特産品はない。ここでは農業は盛んだが、日立市、高萩市等へ勤めに出る人が多く、〝特産品で町おこし〟といった意識はないのだ。しかし、美しい景観と人気ナンバーワンの宿舎施設は町民の誇りであり、町でも自然景観の保全や美化活動に力を入れている。また、県では鵜の岬の緑化植栽にパートを含めて4人の職員を常勤させており、手入れのいきとどいた芝生や花壇・ハスの咲く池などが心を和ませてくれる。

・茨城県立国民宿舎「鵜の岬」／茨城県多賀郡十王町大字伊師☎02293（32）2202

（浅井登美子）

大展望風呂が人気のふれあいセンター「薬師の湯」

人気の温泉地――ここが違う④

温泉開発が、奥地の村に風穴をあけた――両神温泉（埼玉県秩父郡両神村）

秩父といえば東京のすぐ隣り。そんな軽い気持で両神村に向かったのは、梅雨の半ばの良く晴れた日だった。埼玉県秩父郡両神村。しかしそこは埼玉県のはずれ、山梨・長野・群馬の三県に限りなく近い奥地の村だった。

この村が温泉開発に成功したのは、昭和63年。ボーリングの成功はこの村に大きな風穴をあけたかのように、かつてない活気を運んできた。村の温泉施設の広い駐車場は、平日の今日も首都圏ナンバーのクルマでいっぱいだ。

両神山の山麓に広がる両神村は秩父のさらに奥。東京方面から行くと、かなり遠くへ来たと実感する距離だ。

しかしこの緑の美しい山道の先に、温泉が湧いているという期待感は、山奥なればこそのもの。両神村を訪れる人の多くが、きっとこんなふうにワクワクしながら村をめざして走るのだろう。

山道を抜け、小さな集落をいくつか通り過ぎて国道に出る。その国道からさらに村のメインストリートを少し走ると、両神村役場に出た。その建物はなつかしさに溢れた昔ながらの佇まいで、最近流行りのどこかのシティホテルのような庁舎とは違っていた。

村長の山村倉次郎さんを訪ねて、さらに納得。役場全体が、村長さんの誠実で清々しい人柄そのもののような雰囲気に溢れていたからだ。

訪れる人も少なく、養蚕と林業・農業と細々と営んでいたこの村に、大きな活力を与えることとなった温泉掘削事業のプランは、こうした空気の中で生まれた。

両神村が新たな温泉開発のボーリングに成功したのは7年前だが、しかしすでにこの村には〝秩父七湯〟のひとつ〝鶴の湯〟のお湯を使った国民宿舎があった。

「昭和50年の頃でしてね。温泉つきの国民宿舎というので、当時は随分と人気があったんです。ところがそのお湯も昭和60年には湯量がどんどん減ってきて、ついには全く出なくなってしまいましてね。その頃から新たな温泉開発を、というプランがありまして、少しずつ調査を始めていたんです」

と山中村長が温泉掘削の経緯を話してくれる。

農林業の必要性も語る山中村長

昭和62年にはランドサットや航空写真を使った本格的な調査が始まった。地中へ電波を打ち込んで探る地中探査や水質調査、放射線調査などを全て終え、99%間違いなしというお墨つきを、その年のうちにもらったという。

そして翌年の63年に泉源開発事業を開始。その年の10月には見事に掘削に成功し、村中が喜びに湧いたという忘れられない歴史がある。

利用者の95%は村外から。両神温泉薬師の湯の大評判

役場からクルマで5分程のところに両神村ふれあいセンター「両神温泉薬師の湯」がある。緑濃い丘陵を背にゆったりと建つその建物は、今や、両神村のシンボルとして、村の内外の人々から親しまれている。

役場の新井正一産業課長の案内で施設の内部を見せてもらった。フロントのある入口で靴を脱ぎ、中へ入ると、広々と清潔な空間が広がっている。ま

▲並べた先から売れていく農産物直売所。商品はどれも魅力的だ。

国民宿舎「両神荘」

ずはお風呂をということで二階の展望風呂へ。裏庭の花や木立ちを眺めながら、たっぷりと豊かなお湯につかっていると、時間が止まってしまったかのような充実感に包まれる。

入浴のあとは90畳の大広間でひと休み。近くの国民宿舎「両神荘」に三泊したという年配の女性グループは、「何度きてもいい所よ。肌がツルツルしてね、ここのお湯は最高」と嬉しそうだ。

貸切りの個室で宴会を開いていたのは、埼玉県深谷市から来たという、隣組同士の10人組。毎年ここで新年会も開くという常連さんらしい。お年寄りから若いカップルまで、どの顔も湯上りの幸せそうな笑顔ばかりだ。

北京の故宮博物館を思わせる威風堂々の「神怡館」。怡という字は心を癒すという意味だとか。

新井課長は言う。

「利用客はお陰さまで年々増えていまして、平成6年度では年間11万6000人にのぼりました。それも95%が村外からの利用客なんです。村にとってもこのことが何より嬉しいことなんです」

昭和45年に過疎の指定を受けたというこの村にとって、温泉開発は唯一生き残るための道だったと、山中村長は言う。ボーリングに成功した後、「ふるさと創生資金」の一億円をどう使うかで、村民も含めた会議が何度も開かれた。その結果、村にとって大切なのは、温泉を起爆剤として村に活力をよび戻すこと。そして生まれたのがこの、ふれあいセンター両神温泉「薬師の湯」だったのだ。

温泉のあとは農産物直売所や「神怡館」へ

このセンターには、隣接して「農産物直売所」があり、温泉の利用客が必ず立ち寄っていく。売場には農家の組合員が作った季節の野菜や果物、山菜、キノコ、漬けもの、ハチミツなどから桑の実のジャムや手作りの木工細工、鉢花など、思わず買って帰りたくなるような村の品々が並んでいる。

この「農産物直売所」は通常でひと月300万円、多い月には500万円以上の売上げがあるという。村の7軒に1戸が農家というこの村にとって、温泉開発のもたらしたこうした波及効果こそ、何よりの大きな喜びとなったに違いない。

帰りに両神温泉「薬師の湯」と同じお湯を引いているという国民宿舎「両神荘」に寄ってみた。大浴場も客室も国民宿舎とは思えない豪華さで驚くばかりだが、隣接した日中友好の館「神怡館」の威風堂々とした佇まいには、さらに驚かされた。

これは埼玉県が中国山西省との友好を記念して建てたもので、山西省の歴史や文化、民俗などが優美な展示物とともに紹介されている。「神怡館」手前の飲茶レストラン「鳳鳴館」では、中国気分で本場の飲茶や食事も楽しむことができて、訪れる人を喜ばせている。

温泉にゆったりとつかって、雄大な両神山を眺めながら中国文化に触れてみる。続いて、両神村で過ごす時間は、何とも贅沢でユニークで快適である。

若者たちから熟年グループ、お年寄りと、幅広い世代の人たちを見事に惹きつけたこの両神村には、今日も心地良い風が吹きぬけていた。

「両神温泉薬師の湯」☎0494(79)1533

（金山淑子）

❷ 温泉プラスアルファの魅力

温泉プラスアルファの魅力①（静岡県南伊豆町）

温暖な気候と温泉、山海の幸を生かした花とフルーツの里

伊豆半島の東南端に位置する南伊豆町は、温泉とひときわ美しい自然景観、温暖な気候を生かした農産物やフルーツ・花の里として、年間160万人が訪れる観光地である。

青野川の西に広がる下賀茂温泉は古くから知られる温泉地で、気温が低くなる秋から冬にかけては田園の中から白い真綿のような湯煙が幾重にも立ちのぼり、南伊豆の風物詩になっている。高温で湯量が豊富。すべすべしてよく暖まると評判。

昭和40年代までは首都圏の若者の新婚旅行のメッカだった下賀茂温泉だが、いまは温泉と海の幸を中心としたグルメ、花の里めぐり、海水浴や釣りというように観光客も多様化し、年間を通じて観光客で賑わうようになった。

下賀茂温泉はワンランク上の高級旅館として知られ、手入れのよい庭園の中に個性的で贅沢な内風呂、露天風呂の数々があり、さらに、伊勢エビやアワビ等の活作り料理が人気を呼んでいる。最近は、温泉につかって懐石料理の昼食会を楽しむという首都圏からの日帰り女性客のグループも増えている。

町内では高温で豊富な温泉熱を活用したフルーツや花の施設園芸が古くから行われており、南伊豆観光に魅力を添えている。

有名なところでは、石廊崎の「ジャングルパーク」、下賀茂地区の「下賀茂熱帯植物園」、大瀬の「亜熱帯植物園」「アロエセンター」など。

アロエは温暖な気候とマッチして古くから海岸添いに群生しており、〝医者いらず発祥の地〟にもなっている。農家が栽培する肉厚のアロエの葉を加工した、お茶、食品、化粧品類等は同町の特産品になっている。

町の内陸部ではイチゴやメロンのハウス栽培が行われ、3月には「観光イチゴ祭り」がスタート。つづいて4～5月からは「一条竹の子村」でタケノコやシイタケ、山菜狩り等の観光農業がはじまり、秋のミカン狩りへと続いていく。

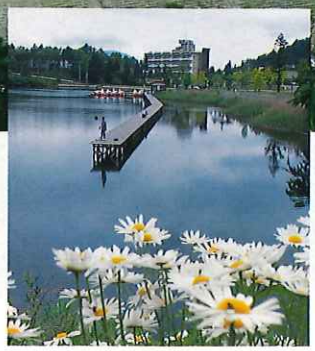
伊豆地区では関係市町村が協力して「花の里づくり」にも力を入れており、年間を通じて道路沿いや広場の「花いっぱい運動」を推進している。ちなみに南伊豆町の「花」はマーガレット。伊浜地区は日本のマーガレットの70％を生産しており、花卉栽培の先進地でもある。

▲温泉ホテル「南楽」には、露天風呂を含めて個性豊かな風呂が10数個所あり、瓶型内湯も人気の一つ。

▲早春の観光農業の目玉、川合野地区のイチゴ狩り

▲マスクメロンの温室栽培をする佐藤さん。100度近い高温の湯を暖房に使うので冬もポカポカ。

▲海岸沿いに群生するアロエ。12月に赤い花をつける。



温泉プラスアルファの魅力②（長野県麻績村）

村の産品を盛り込んでリッチに

村営レストラン［聖レイクサイド館］

麻績村は長野県のほぼ中央、長野市と松本市のほぼ中間にあり、別荘地として有名な聖高原をはじめ、自然の豊かな村だ。

過疎の問題はここでも例外ではない。昭和25年には6000人近くあった人口が今日では3600人あまりとなり、高齢化もすすんでいる。周辺の市町村に比べて観光地としての魅力もいま一歩で、施設の老朽化も目だつようになった。だが地域活性化のために、麻績村をたんなる観光地にはしたくないという思いが強かった。

観光課長の高野さんは言う。

「農村から農村がなくなるとなんにも残らなくなってしまう。人口が減るのはごく自然なことで、過疎だ過疎だと大騒ぎしても仕方ない。それよりまず村が誇れるものをつくりたかった」

平成元年度からスタートした「麻績村ふるさとづくり事業」は、まず自分たちの村がどんな魅力をもっているかを認識することから始まった。村内3つのゾーンで、それぞれの地域特性を生かした事業が展開されている。

＊

まずその一環として平成3年5月にオープンしたのが、信州聖高原は「聖レイクサイド館」。「食」により地域のイメージアップをはかり、活性化していこうという試みだ。

レストランは聖湖畔に立つドイツ風の洋館で、一歩足を踏み入れるとその優雅な雰囲気にこちらが戸惑ってしまうほど。館内にはグルメレストラン『ピルツェンバルト（きのこの森）』をはじめ、ティールーム『アップルヒュッテ（りんごの小屋）』、地場産品の展示販売

▲落ち着いた内装。四季折々に姿を変える湖畔の眺めが美しい。

▼本日のメニュー。その日の朝、湖でとれたナマズが早速オードブルに登場。

コーナーがある。

料理やサービスも本格的だ。メニューには地域産のきのこ、りんご、信州産の肉のいずれかを使用し、神戸の一流料理店で学んできた村のシェフがその日の素材に応じてメニューを決める。フロアー係も県内のリゾートホテルで研修を受け、ソフトの面にもぬかりはない。けっして都会のきどったレストランを真似しているわけではなく、素材からはじまって料理やサービスまで、これは立派な麻績村流である。

「民間の資本を入れずに、自分たちの力でここまでやったのがよかった。村民たちにとって、ここが自分たちの村のレストランだと胸を張って言える場所にしたかったんです」

自然とアウトドアの拠点・聖高原に「食」というあらたな魅力で加わった「聖レイクサイド館」。別荘の利用者をはじめ、都会からもその味を楽しみにくる人が増えているという。

＊

さて「食」を含めたアウトドアの基地を聖高原とすれば、のんびりくつろげる宿泊の拠点となるのが「シェーンガルデンおみ」である。麻績インターから5分、北アルプスの大パノラマと筑北三山の雄大な眺めを楽しめる絶好のロケーションに今年4月からオープンした。

鉱泉が発見され、現在温泉としての認可を申請中だ。70名の宿泊が可能で、そのほかレストランや特産品の展示販売コーナーもある。6万4000㎡という広大な敷地には、およそ500種類の花木が植栽されたガーデンをはじめ、1500人は収容可能という屋外ステージも用意されている。

「この施設の狙いは、都市と農村の交流の場です。宿泊施設としてはもちろん、さまざまな文化活動あるいは経済活動の拠点になればと思います」

村のもうひとつの魅力は歴史や文化。国の重要文化財（福満寺・薬師如来座像）をはじめ、数々の文化遺産をもつ麻績村ではこの風土を内外に伝えようと「信濃観月苑」を建設した。茶会や歌会などの開催や、出版物の刊行を行うなど、さまざまな文化活動を行っている。

＊

平成5年3月の長野自動車道麻績インター開通により、関東・関西の大都市圏からも3時間程度となり、村を訪れる人びとの数はこれからますます増える見込みだ。

聖高原で自然をたっぷり満喫したら、観月苑で歴史の心に触れ、温泉につかってゆっくりくつろぐ……、農村ならではの魅力が三位一体となった好例である。

▲レストランを切り盛りする地元のスタッフ。料理からサービスまで日々研究は続く。右は高野観光課長。

▲「シェーンガルデンおみ」の大浴場。窓越しに雄大な山の景色。

▲限定販売のワインや果物のジャムなど、原材料はすべて村の農産物だ。

温泉プラスアルファの魅力③（長野県栄村）

大自然をひとりじめ！ 秘境秋山郷で露天風呂を体験

ひなびた山間の露天風呂といえば、温泉ファンならだれもが一度は行ってみたいと思う憧れの場所。昔平家の落人が住みついたとされる信州秋山郷は、清流ぞいに温泉が湧き、雄大な山並を堪能できる数少ない里だ。

長野県栄村にある**切明温泉**は、その秋山郷でももっとも奥深いところに位置する温泉。渓流のあちこちからは熱い湯が湧き出し、石を動かして水の流れを調節すれば自分だけの露天風呂を楽しむことができる。秘境の地にたつ公営の一軒宿として、ガイドブックなどでもおなじみなのが「雄川閣」だ。バスは日に2本、高速インターからも1時間以上とけっして交通の便がいいとはいえないこの場所に、年間6000人（入浴のみは月に800人）の観光客が訪れるというから、その人気のほどは確かなものだ。

＊

これだけ自然豊かな村とあって、都市からの常連客も多く、ついに今年6月には教授や写真家、登山家、旅行愛好会の会員らがメンバーになって「栄村の自然と文化を愛する会」が発足した。

会員制でメンバーを募り、運営には㈶栄村振興公社があたる。キャッチフレーズは「みどり豊かな心のふるさと」

釣りのあとの温泉が楽しみと、年数回やってくる常連客。

切明温泉「雄川閣」

江戸時代の暮らしを再現した「のよさの里」

だ。

会員には特定施設の割引が適用され、そのほか駅までの送迎サービス、季節の特産品の宅配利用などが受けられる。ユニークなのは、現地を訪れたとき山菜採りや釣りの案内人をつけてもらえること。これなら奥深い山のなかでも地元の人と同じように歩くことができ、まさしく秘境を満喫できる。

「会の発足にあたっては、特に新しい開発をしようという気はありませんでした。ここはリゾートホテルではないのですから、今ある雄大な自然を楽しんでもらえたら、それでいいと思ってます」

とは会発足のメンバーでもある雄川閣の支配人山田直広さん。これだけ温泉の豊富な場所であれば、湯に浸かるだけでもじゅうぶん楽しめるが、知られざる村の魅力をさらに伝え、都市との交流を図ろうというのが会発足の狙いだ。

たとえば子どもたちが農業体験をできる「トマトの国」、郷土料理と高濃度の赤い湯が自慢の「楽養館」。そして江戸時代の村の暮らしを再現した宿泊施設「のよさの里」。

日本有数の豪雪地帯でもある栄村は、長いあいだ他地域との交流が閉ざされ、逆に歴史的遺産が数多く残されることになった場所。当時に思いを寄せ、各地の史跡を訪ねてみるのも一興だ。

＊

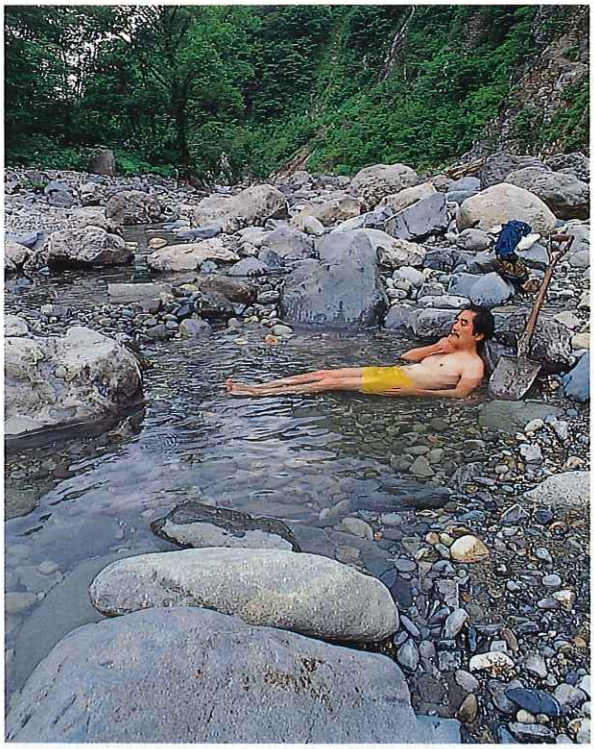
民俗学はさておき、やはりわれわれ取材班の興味の的は露天風呂。雄川閣のご主人から大きなシャベルを借り、タオルを首にひっさげて、天然露天風呂を掘りに河原へといざ出発。ブクブクッブクッ……。河のあちこちから熱湯に近い湯が湧き出しているのを見て意欲満々で温泉づくりに取りかかる。

ポイントを決めたら、岩や石を動かして湯の流れを調節。水と湯がちょうどいい温度に混ざるようにするのがひと苦労だ。掘ったり埋めたりの作業をするうちに、あっという間に汗が吹き出てきた。

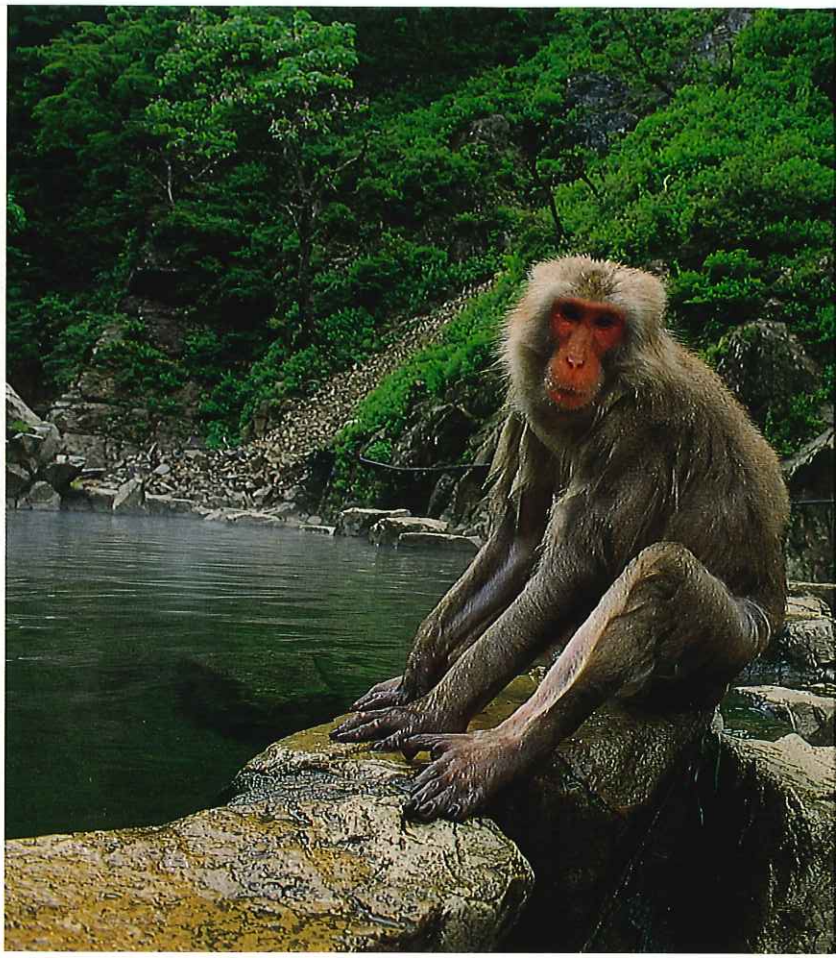
「こりゃいい運動だ」

「意地でもはいんなきゃ」

ようやっと完成した露天風呂は、大の大人が入るにはちょっと浅め。おまけによーくかき混ぜないと足のほうが冷たいままなので結構忙しい。それでも見上げれば雄大な山並が美しい天然露天風呂。この騒ぎに野性のサルまで見学に来るという、秘境ならではの温泉体験を楽しめた。



▲天然露天風呂づくりの最大のポイントは、温泉の流れをどううまく導くかだ。河原の石を移動させるのはなかなかの重労働だが、それだけに自分だけの風呂に浸たれる喜びもひとしお。



▲好物の大豆をめざして潜水を披露してくれたサルたち。のぼせそうになれば岩にあがってひと休み。

温泉プラスアルファの魅力④（長野県山ノ内町）

世界で唯一、サルの温泉で町おこし/渋温泉

「人間たちのあいだでは温泉ブームが復活したそうだ」

「まあそれはいいけど、俺たちの入浴シーンがこの町の目玉なのはどうもな」

と地獄谷野猿公苑のサルたちが喋るわけはないが、ここ長野県山ノ内町は「お猿の温泉」として有名。志賀高原に生息する野性の猿たちが世界で唯一温泉に入浴しにくる場として、観光客の人気を集めている。

＊

山ノ内町は温泉の豊かなところ。志賀高原を源とする横湯川が町の中央を流れ、景色全体が湯煙に包まれる温泉街だ。石畳が敷き詰められた通りには昔からある宿が立ちならび、情緒ある佇まいをみせている。

この渋温泉のユニークなところは外湯巡り。泊まり客に宿から共通の鍵が渡され、全部で九つある湯をめぐっていくというもの。温泉街らしい石畳の道をのんびり歩きながらそれぞれに異なる泉質・効能を楽しめる温泉トレッキングだ。

湯の温度はかなり熱く、ほんの数秒

浸かっただけで肌が真っ赤になるほど。ぬるま湯に長時間という人には驚異の温泉だが、地元のおばあさんたちは平気な顔をして浸かっている。

「これくらい熱くないと、効かないよ」

さっと入ってさっとあがる、これが渋温泉の常識だ。なるほど慣れれば病みつきになるかもしれない。

地元の湯をより多くの人に知ってもらおうと、渋温泉では昭和59年に「出前温泉」を行った。観光客の減少に少しでも歯止めをかけようとする試みだ。町と姉妹提携している東京都足立区に外湯の湯を各1トンずつ、計9トンを届け、特産の野沢菜やリンゴなどを一緒に配ったところ、大好評を博し話題になった。そのあとは個人宅配業者も現れたという。

費用や手間がかかることから、現在定期的な「出前」は行われていないが、運送費を負担し日程があえば今でもじゅうぶん対応してくれるとのこと。

＊

さて渋温泉の目玉、地獄谷のサルに戻ろう。地獄谷野猿公苑が開園したのは昭和38年、里の猿害対策にと当時すでに餌付けに成功していた高崎山にならって始めたのがきっかけ。世界で唯一サルの入浴シーンがみられるとあって人気が高まり、昨年の観光客は年間18万人にのぼった。すぐ近くに一軒宿もあり、人間もひと風呂浴びることができる。

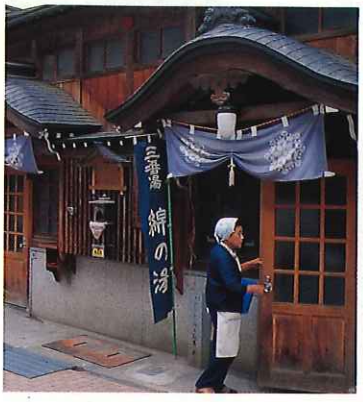
いくつかの集団にわかれて生息している志賀高原のニホンザルのうち、ここ野猿公苑を訪れるのは一つのグループで総勢360頭の群れだ。仲間を率いるボスザルもとうとう九代目に突入した。

ここではほぼ一年を通じて猿を観察することが可能だが、入浴シーンを見るなら冬がおすすめ。彼らは温泉には温まる目的で来るのであって、けっして湯上がりにビールを一杯などという旅気分ではないのだ。われわれ取材班が訪れたのは初夏、なるほど目の前のサルたちは温泉など見向きもしない。

入浴シーンを撮影したいと無理にお願いしたところ、係員の人が取り出したのは好物の大豆。これを温泉のなかに投げ込むと、サルも仕方なく（？）餌を拾おうと湯に浸かってくれた。湯にのぼせて岸でひと休みする姿や、深いところでの潜水技など、野性のサルには珍しい（？）生態を披露してくれた。

写真／小林恵　文／浅井四葉

（18頁～23頁）



渋温泉の外湯は、建物自体がそれぞれ個性豊かで見学するだけでも楽しい。管理は地元の人たちが交替で。

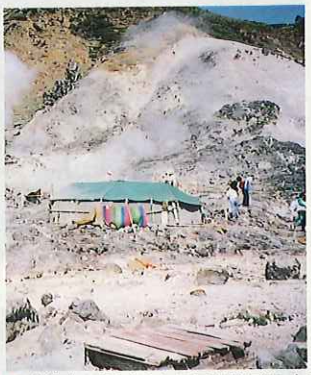
▼町では昔懐かしい射的場やスマートボール場も発見した。

●お問い合わせ
- 「聖レイクサイド館」長野県東筑摩郡麻績村聖高原☎0263-67-3511
- 「シェーンガルテンおみ」長野県東筑摩郡麻績村日3434☎0263-67-2800
- 秋山郷・切明温泉「雄川閣」長野県下水内郡栄村切明☎0257-67-2252
- 秋山郷・のよさの里「牧之の宿」（表紙）☎0257-67-2345
- （財）栄村振興公社／長野県下水内郡栄村大字北信☎0269-87-3115
- 渋温泉旅館組合／長野県下高井郡山ノ内町☎0269-33-2921
- 地獄谷野猿公苑／長野県下高井郡山ノ内町地獄谷☎0269-33-4379

▲ブナとヒバが合体している森
▶下北半島・佐藤平の美しいブナ林

ブナ林で目覚め、里へ降りて一番風呂

〔私と温泉〕 文・写真 館 英和



▲硫黄泉の近くの小屋で湯治する人々
◀凄まじい硫黄泉が流出する玉川温泉

私は、北は北海道黒松内町歌才の北限のブナ林から、南は九州の大隅半島垂水市高隈山スマン峠の先の南限のブナ林まで、何年かかけて訪ね回ってきました。そこにブナ林があれば行まなければならないところが、まだまだ全国にたくさんあります。

森に近づけば、どこにも温泉場があります。しかしどうでしょう、昨今の名湯とか穴場のお湯の現状は。ブラウン管や旅雑誌で紹介されると、忽ちそこは町中の銭湯と化けてしまいます。芋を洗うようなシーンにでっくわすことも再三です。なんでこんな山奥のお湯が繁盛しているんだとがっくりです。あの硫黄の匂いと、ヒバ材の放つえもいわれぬ薫りを鼻腔いっぱい胸一杯にして、ジワーッと湯船に沈み込むといった快感がないではありませんか。天井から雫が湯面に落ちる静かな音もありません。山の霊気など微塵もないではありませんか。

そこで、私が選んだスタイルは、麓の村や町のお湯を利用することです。私が何度か行ったブナ林近くのお湯で印象に残っているところを数カ所あげてみましょう。

天にも昇り地獄にも堕ちよ

青森県は下北半島の恐山に湯坂を登ってよく走ります。ここは公営温泉ではありませんが、恐山のなかのお湯は

抜群です。私は勝手に黄泉とか地獄とか三途の川とかは硫黄泉が吹き出し沸騰し流れるサマだと解釈していますから、恐山の花染のお湯にジリッジリッと浸かりゆくなどというのは、もう、天にも昇り、地獄にも堕ちよの気分なのです。もちろん湯船はヒバ材ですが、じつは周囲はブナとヒバの混淆林で、自然に、硫黄とヒバの発散する樹霊に包まれているというわけです。

湯上がりの火照りのままに宇曽利山湖の対岸の森に入れば、湯煙に浸かっているせいか、それはそれは色白のブナたちがいます。紅潮したヒバと真っ白なブナが肌を密着させている姿などたいそうエロチックなのです。

恐山の奥には薬研温泉があります。その少し奥の今は大畑町の管理にある、奥薬研河童の湯に浸かり、佐藤平のブナ林に行くこともあります。こんなに美しいブナ林があるのかと感嘆します。ほんとうに、狭い範囲ですが、絶対に伐採したりしてはいけない森です。

さっぱり汗を流して白神へ

危ないブナ林の象徴では白神山地です。青秋林道の中止は結構ですが、奥赤石川林道まで閉鎖したのには参りました。生態系保存地区とか、世界遺産指定エリアとか設定するのは判りますが、私には余りにも冷酷な仕打ちです。

白神の山麓にある美山湖温泉（西目屋村）

山菜採りの人がひとしきり入るだけで、山を荒らすような人達に出会ったことはありません。もう白神には行かない、と言いたいところですが、内緒でいい所もあるし、困ったものです。

ところで西目屋村の美山湖温泉はほんとに気軽に入れるいいお湯です。もっと早い時間から開けてください。東京から八時間かかってやっとたどりつくのですから、さっぱり汗を流して山に入りたいものです。

最近村でも観光誘致が始まり、立派な宿泊施設ができました。ところがいっぽうダム拡張の話もあって、そうなれば美山湖温泉も水没してしまうとか……。

白神山地を秋田県側の二つ井から入って藤里町から訪ねるときは、湯の沢にある藤里町営温泉保養所に入れさせていただきます。白神の駒が岳登山のルートになりますが、途中の岳岱のブナ林は一見の価値があります。樹齢数百年の巨木も奥まったところに静かに立っていますが、ここのブナ林の特徴はその多くのブナの根張りが巨岩を包み込んでいるところで、巨大な盆栽を見るようです。この藤里町にも、新しい宿泊施設が出来たそうですが、誰も町民が入っていない昼前のお湯をひとり占めして贅沢すぎて申し訳がないくらいです。

ブナ林での曙光は最高

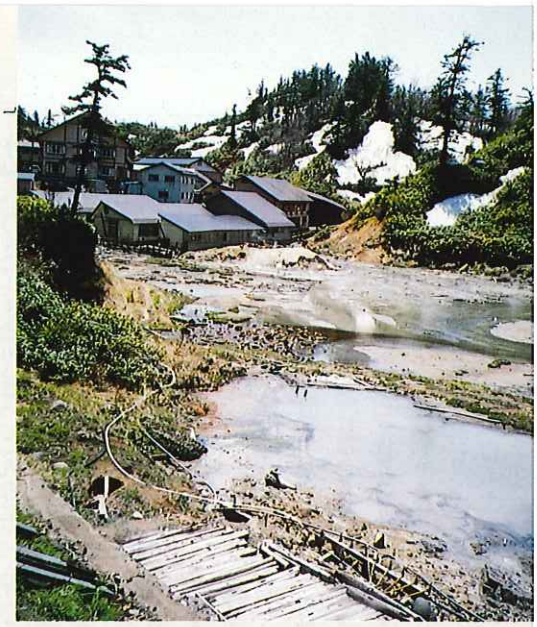
いずれにしても、公営温泉は地元の人の憩いの場です。その土地の言葉が反響し、ほとんど、会話が成り立っていないことが、多いのですが、それはそれで、温もりのけむりに包まれているのです。裸には人々のくらしぶりが刻まれています。湯船のすみで殊勝にも現実に戻されるときでもあります。森のなかで寝るとでも言おうものなら、知っている宿に電話しようと熱心に言ってくれる人もいて、有り難いのですが、私はほんとうにブナ林の中で夜を過ごしたいのです。そう言うと、シロー目で見られたりします。

ここで、言っておきますが、温泉旅館に泊まらないのは、宿代が倹約できるということよりも、お日様が上るころには、森に入りたいためです。霧に包まれたブナ林に曙光がじょじょに射し込んでいくシーンは最高なのです。勿論、クルマのライトに逃げ込む野ウサギやヒメネズミや、ムササビを目撃したり、夜更けのブナ林のチシマ笹の風に揺らぐ音や、キョッキョッキョッキョッとしじまに鳴く夜鷹の声をつまみに、一杯やり、横になれば、ブナの梢越しの夜空に瞬く星屑や月の前面を走るように吹き飛ぶ雲を眺め、また、一杯という楽しみがあるのです。白い目で見られるのは、心外なのです。

もっとも、雲行き怪しく、大粒の雨がザーッときたときなどは、明かりの消えた公衆浴場の駐車場に引っ返し、ただ雨音を聞いて臍をかむ夜もありましたが。

秋田を南下、北上して玉川、後生掛、八幡平温泉へ

秋田を南下して、森吉山の辺りでは、阿仁温泉も利用します。なかなかスマートなお湯です。クマ牧場のある打当にも温泉がありますが、もうここもブナ林の本場なのです。ぶな平から田沢湖に抜ける林道は壮観です。岩手県側に入ると広大な牧場になっていますが県境の峠はみんなブナです。南下を続けると角館で、例の日本一のブナの巨木が発見された和賀山塊ですが、いったん北上して、玉川沿いに鹿角八幡平方向にブナ林と温泉を求めて走ります。



北投石（ベイトウ）でも有名な玉川温泉では、凄まじい硫黄泉の噴出を眺めるだけでも温泉に入った気分になれるほどです。重篤な病いの方々が湯治に訪れるのもわかります。

公営の温泉ではありませんが、後生掛温泉も、ほんとうに薬効十分なお湯です。アスピーテラインを登れば、ブナの森林限界を越えて、オオシラビソの世界に入りますが、見渡せば東北の山々のパノラマであり、眼下はブナの大樹海なのです。

岩手山の麓へと下れば、松尾村に公営の温泉八幡平温泉館森乃湯があり、夜は十時まで入浴可能ですから重宝しています。長距離ドライブで疲れたときは、松尾八幡平で東北道を下りて、駆け込み、露天風呂でゆっくり足腰を伸ばして、陸奥の夜空を仰ぎます。行きに寄るときは、また来たか、という思い、帰りに寄るときは、さあ、もう一巡りするぞ、という気分になります。松川温泉を経て岩手山の網張へ通じる道を建設するとかしないとか。ブナ林の中の道になるのでしょうが、ほんとうに、森のことを思えば、もう開削は見合せてという気持ちです。

いっぽう葛根田川に沿って昇れば、そこもブナ林と温泉です。松倉山の森にブナの巨木あり、とのことですが、今は二万五千分の一の地図で位置を確かめイメージすることにとどめています。何しろ、日本一のブナの巨木が新たに発見されたからです。

▶真昼温泉（沢内村）
▲後生掛温泉

もう乱伐はやめて豊饒な森を

その和賀山塊外れの小影山をめざしたことがあります。できるだけ近くで夜が明けるのを待とうと、憩いの道なる表示に従い、車で突き進んだまではいいのですが、そこは杉の植林地で、道は狭くぬかるみ、おまけに路傍にはごろごろ岩石が突き出ていてにっちもさっちも行かず、悪戦苦闘、まったく往生してしまいました。

真昼岳への林道は静かな渓流に沿った道です。途中で伐採林に出会い、搬出のための鋼のロープが錆びついて散乱していたりする傍らに、それでも母樹があって實生が育ち、稚樹があるのを見ると、ホッとします。丸裸に伐採し、剝き出しの土地にしてはいけません。

老齢過熟林だから、伐採して、更新のお手伝いをするという、林学論理には、私はついてはいけません。ブナの豊饒な森がある町村は、人口過疎地でなければならない一面を持つとまで確信しています。

冬の鷲の巣

真昼温泉に立ち寄り、一番風呂から上がったときは申し訳ない思いがしました。デイ・サービスのバスに乗ってきた村の老人たちを、大分待たせてしまったのです。どうやら私が東京からの旅人だということで入浴を控えてくださったようで、沢内村の福祉の一面を見学することになりました。この村には薬効あらたかな麦飯石を浴槽に取り入れたモダーンな入浴施設も完成しています。

お隣りの町は有名なお湯の町、湯田です。ほっとゆだの駅名でも周知のように、温泉で町起こしの典型のところです。秋田高速道の工事も行われていて、お湯の町としても発展が期待されています。町内には六か所の公営のお湯が点在しています。わたしがもっぱら利用するのは、穴ゆっこです。鷲の巣の金山跡を見るのも面白く、また鷲合森の鉱山跡辺りまでえんえんダートを登って、ツキノワグマの気配を感じながら、ブナの二次林を見るのも楽しみにしています。

どこにも空があるようにこの地上に地下の世界がない場所はない。沸きいずるお湯に浸かることは、地中の空に沈むことなのです。

（やかた・えいわ氏／作家）

［私と温泉］

ローカル線に乗って「お湯」めぐり

三浦　春紀

車というものがどうにも嫌いで、昔から旅といえば鉄道やバスを利用していた。

三〇を過ぎてからは、ローカル線の魅力にとりつかれてしまい、すっかり鉄道少年ならぬ「鉄道おじさん」になってしまった。今でも、月に一、二度はローカル線に乗ってあちこちに出掛けている。

最近は目指す先が温泉、ということも少なくない。実際、日本を旅していて、温泉に行かぬ手はない。もっとも、温泉といっても、ぼくは共同浴場や公衆浴場のようなタイプが好きだ。いわゆる温泉旅館はちょっと敷居が高いし、温泉にだけ入れてもらうのも、なにやら他人の家で弁当を食べているようで落ち着かない。もともと一人旅が多いので、旅館からは歓迎されない客である。その点、共同浴場なら気が楽だし、地元の人の会話を漏れ聞くのもまた楽しい。

最近は、あちこちに新しくて清潔な共同浴場が増えているのでうれしい。これはどうやら、例のふるさと創生の一億円で温泉掘削を行った町が多かったからのようだ。おかげで、最近はますます温泉旅が楽しくなってきた。

今では新幹線も停まる駅となった山形県の高畠は、以前は糠ノ目という風情のある名前だったが。現在は町の名前がそのまま駅名になっている。この駅は、最近増えてきている温泉駅だ。

この駅は、上り列車に乗ってホームに降りると、改札からそのまま外に出ないで入浴できるのがありがたい。本格的な温泉駅は北上線の「ほっとゆだ」を嚆矢とするが、あちらは改札から一度外に出なければならないので、冬はちょっと辛い。それに、高畠駅は各駅停車を含めれば一時間に一本は列車があるので、手軽な入浴が楽しめる。この周辺は、赤湯温泉や上山温泉など、味わい深い温泉が多いが、駅の温泉もまた一興だ。小さいながら露天風呂もある。駅とはいいながら、地元の人は銭湯感覚で利用しているようだ。

駅は最近、どんどん多機能化している。図書館や郷土史料館、公民館やレストランなどを兼ねた駅舎も多くなっており、温泉のある駅もこれからますます増えていくことだろう。

山形県というのは、すべての市町村に温泉が湧く温泉天国である。その中でも人気の高いのは、木造三階建ての旅館街や、見事な鏝絵で有名な銀山温泉である。

銀山温泉は、尾花沢市のどん詰まりに近いところにある。尾花沢市自体鉄道の通わないところで、その中心部まで山形市からバスで一時間半、そこからまた別のバスに乗り換えて三〇分ほどかかる。それでも、新幹線の開通のおかげで、朝早く東京を出れば、昼過ぎには着けるようになった。

銀山温泉とは、その名の通りかつての「銀山」で、伊達政宗のライバルである最上義光の軍資金にもなっていたという。最上家の没落後は、当然の如く徳川幕府の天領となった。旧銀山坑は洞窟観光のような形で遺っているが、あまり整備されているとはいいがたい。

銀山温泉にも、一軒の共同浴場がある。といっても、管理人もおらず、入口の箱に百円玉をいれるだけ、という大らかさだ。浴場はやや狭く、薄暗いが、湯は抜群だ。思わず、「極楽極楽」と小声でつぶ

銀山温泉の街並み

やく。

ところが極楽は、たまにとんでもない意地悪をする。そのすぐ後、近くの蕎麦屋に入ると、女将が蕎麦はこれから打つ、というので詮方なくうどんを注文した。ところが幾許もなく亭主がやってきて、うどんを啜っている目と鼻の先で蕎麦を打ち始めるではないか。この時は、ちょっと泣きたい気分だった。

福島県の山中に、熱塩（あつしお）と言う駅がある。正確には、あった。かつて、蔵の街（と言うより、今やラーメンの町）喜多方からここまで、日中線というローカル線が細々と走っていたのだが、国鉄時代の昭和五九年に廃線となった。駅跡は記念館となり、保存されている。なかなかモダンな駅舎だ。近くには踏切もあるが、線路はそのすぐ先でザックリと断ち切られている。

一〇分ほど歩いたところに、熱塩温泉がある。共同浴場がある、と聞いて来たのだが、坂道を登り、小さな温泉街を抜けていくと、突き当たりにはこの温泉でもっとも大きな旅館と、寺があるきりで、共同浴場は見当たらない。

おや、と思って引き返すと、ちょっと手前、小屋のような建物がそれであった。料金は隣の叶屋商店へ納入してくれ、という案内がある。夕方の四時過ぎからは、地元の人たち専用となる、まさに地域のための共同浴場だ。

何でも屋のような叶屋さんに断って、入浴する。入口は男湯と女湯に分かれているが、内部は浴槽にわずかな仕切りがある程度で、ほとんど混浴である。と思ってよく考えてみたら、もともと脱衣所に仕切りがなかった。観光客の利用など、ほとんど考えていないのだろう。さほど大きくない湯槽に浸かりながら、「若い女性が好奇心で入ってくる、などということはないんだろうなあ」と下らないことを考える。本当はちょっとばかり期待しているのだ。

もちろん、そんなことはなかった。

新潟県と山形県の県境を走る米坂線。沿線には小国温泉、大滝温泉などがある。

わたらせ渓谷鉄道は桐生から銅山の町・足尾へ延びる旧JRから転換した第三セクター鉄道である。銅山が役目を終えた足尾の町は、今は人影も少なく、寂しい。鉱毒に犯された足尾の山々は、今も無残な姿を晒している。

が、今では、この鉄道は土・日ともなると、東京方面からの観光客が大挙してやってくる観光路線となっている。さしたる観光資源もないこの鉄道に客を呼んでいるのは、やはり温泉である。

足尾のずっと手前、水沼駅にある温泉センター「せせらぎの湯」は、週末には地元の人よりも観光客のほうが多いくらいだ。風呂に入りに行くのに汽車に乗る。夕方の車内は、風呂上がりの乗客で満員になる。

東武鉄道の急行「りょうもう」との接続が改善されて、東京からの距離はかなり近くなった。いわば、気軽な日帰り温泉旅である。最近流行の安・近・短にぴったりだ。

「せせらぎの湯」の露天風呂からは、渡良瀬川の流れが眼下に見て取れる。わずかな時間で、東京の喧騒を忘れさせてくれるこの温泉もまた、貴重な存在ではある。

あまり近すぎて、やや旅情には欠けるが、たまにはこんな旅も悪くない。すぐ近くには、最近人気の高い星野富弘の美術館もある。

南紀白浜は、関西の名湯である。といってもぼくは生まれも育ちも関東なので、割と印象が薄い。だいたい、紀伊半島というのは関東から行きにくいところで、一泊二日で、となるとなかなか触手が伸びない。

そこで、三泊四日の熊野詣でのついでに足を伸ばした。紀勢本線の和歌山県側（最近はきのくに線などと称している）は、晴れてい

白浜「崎の湯」

れば鈍行に乗るに限る。日本ではこんなに海を愛でられる路線はほかにないからだ。

白浜の駅は町外れなのでバスに乗らなければならないが、「走り湯」「まぶ湯」などのバス停は、いかにも温泉街で、聞いているだけで楽しい。

白浜も共同浴場の多いところだが、やはり目指すのは「崎の湯」だ。斉明、天智、持統、文武の四人の帝の行幸を仰いだ日本最古の温泉、という（このメンバー、天武が抜けているのがちょっと不思議）。湯壺ともいわれ、町文化財に指定されているありがたい温泉である。

ところがこれが無料で入れる露天風呂なのだ。もっとも、それだけに下足箱があるきりで、脱衣所もない（女湯は分からないが）。男湯の方は、すぐ近くの海中展望塔から丸見えである。

しかし、頭上を覆い隠すものは何もないし、すぐ先は海で、温泉に浸かってしまえば最高のロケーションだ。これで、屋久島の海中温泉のように、夜、零れ落ちるような星空を見上げながら入浴できれば最高だが、残念ながら「崎の湯」の営業は夕方五時まで。五時になると、管理人が掃除を始めてしまう。

ぼくがもっとも好きな温泉のひとつが、長野の別所温泉である。上田から別所へのアクセスである上田交通は、かつてCFにも登場した円窓電車が有名だったが、今では東京の地下鉄のお古を使っており、車両の面での情緒は失せた。

が、「信州の鎌倉」の別名通り、古い寺社が建ち並ぶその町並みは、湯上がりの散策を楽しませてくれる。

駅から温泉街まではだらだら坂を少し歩くが、温泉で落とすための汗を掻くと思えば心地よい。別所もまた共同浴場が多く、行くたびに入る湯を変えたりするが、去年訪れたときは「大湯」を選んだ。

信州の鎌倉別所温泉「大湯」

ローカル線に乗って「お湯」めぐり

「大湯」は卵の匂いのするいかにも温泉らしい温泉で、呑めば通風にも効くという。ありがたく頂戴することとする。

別所のいいところは、信州だけに蕎麦のうまいことだ。そして水がうまい。蕎麦湯がまたうまい。湯上がりに食べるうまい蕎麦は、何物にもかえがたいものがある。

新しい鉄道に乗って初めての温泉を訪ねる。こんな旅は格別だ。最近は、廃止になるローカル線が多い一方、新線もいくつか開通している。

山陰と山陽をつなぐ智頭急行は、鳥取と関西を最短時間で結ぶ鉄道として昨年末に開通したが、その矢先の大震災で、大きな痛手を受けた。大阪方面への乗り入れができなくなったのだ。それでなかなか乗りにも行けなかったのだが、神戸周辺のJRが開通した初夏、初乗りに出かけた。

智頭急行は鳥取県と兵庫県を結んでいるが、その途中ではほんの少しだけ岡山県を通る。そこに、「あわくら温泉」がある。これまで鉄道もなく、高速道路が通っているわけでもないので、あまり知られない温泉だった。

南阿蘇 下田 城ふれあい温泉駅

露天風呂がある、という「黄金泉」に向かったが、鉄道開通で客が増えたのか、肝心の露天は増設工事中。おかげで料金も安かったが、やはり残念。智頭急行沿線は鳥取の殿様・池田家の参勤交替の道だった因幡街道の町並みが見事に残っているので、また再訪を期すことにしよう。

新しいところでは、九州阿蘇山麓を走る南阿蘇鉄道に「ふれあい温泉駅」が登場した。同地に昔あった下田城を模した駅舎で、改札を出ると浴場の入口。広々として湯も豊富とのこと。この沿線には他にも温泉地が沢山あり、まさに〝火の国・くまもと〟を満喫できる。まだ訪ねていないので、次の予定に入れることにした。

都市からふるさとへのメッセージ

都市に"ふるさと"のアンテナショップを

熊本県・鹿児島県・沖縄県の新たな試み

東京には46道府県の東京事務所があるが、最近これらにアンテナショップ的なものが付加されてきた。

県や市町村、JA、地元有力企業等が協力して地方を積極的にPR、郷土に対しても都市のニーズや情報を的確に提供していくというもの。

東京のど真中、銀座・有楽町に進出した日本の南の国の新しい試みを取材してみた。

「かごしま遊楽館」日比谷シャンテ側玄関

ひとと食と情報が出会う
有楽町の新名所「かごしま遊楽館」

有楽町駅から2～3分、オフィス街と映画、ショッピング街のある繁華街の一角に、5月30日、「かごしま遊楽館」がオープンした。

一日20万人の人通りがあるといわれる晴海通りに面した千代田ビルは、ビル内の通路を通るとロードショウ映画館街の日比谷シャンテ広場に出る。人々が往来し、ビルの両側に入口があることは立地条件としても申し分ない。

新装したこのビルの一階から三階までを鹿児島県が借りて内装。一階には県特産品のさつまいもなどの加工品、焼酎、お茶、さつま揚、肉製品の販売コーナーがあり、大学いもやさつま揚げの実演販売も行っている。手頃な価格でできたての郷土の物産が購入できるとOLや主婦たちに人気があり、また男性客は100種以上取り揃えた焼酎に関心を示す。県や市町村発行のグラフ誌、パンフレット、旅行ガイドのカタログなどのコーナーもある。

二階は鹿児島の食材を使ったレストラン「遊食菜食いちにいさん」。昼食は野菜や鹿児島特産品をたっぷり盛り込んだ定食、夜は黒毛和牛ステーキや黒豚のしゃぶしゃぶなどを楽しめる。鹿児島の地酒も味わえるため、昼間は女性客、夜は男性客に大もて。

三階は屋久杉製品、薩摩焼、大島紬等の工芸品の展示販売コーナーと、企業誘致、観光物産、流通情報などの業務を行う県東京事務所別館があり、待ち合せやくつろぎに使える「ふるさとプラザ」となっている。

開店以来2ヵ月、一日延1000名が利用

一階「さつまいもの館」、二階レストラン（上）

◀「わした」店内

大石観光物産課長

するという順調なすべり出しで、場所柄土・日曜日も賑っている。当初は鹿児島出身の人に案内状を出していた関係もあって同県人の来店が多かったが、最近は一般の人の利用率が高くなっている。

「かごしま遊楽館」東京事務所別館に派遣されてきた県職員は11人。一、二階の東京での採用者を含めると約50人が遊楽館で働いている。

観光物産課長大石司さんは、開館の準備から手伝ってきた県庁職員の一人。

「県では総合計画の中に〝食の創造拠点かごしま〟の形成を重要なテーマにあげ、農産物のブランドの確立、観光鹿児島の魅力あるイメージづくりのために、首都圏に情報の受・発信拠点を設けたいと準備をすすめてきました。このビルは県がビルのオーナーから一括して借り、テナントを出す企業が県に使用料を支払うという方法を取っています」

一階の「さつまいもの館」はさつまいも産業振興協組が経営主体で、菓子、食料品、酒類製造販売など49社の組合員が出店している。

二階レストランは県内で活躍する㈱フェニックスが経営、県内の良質の素材を使って都市の客のニーズに合せたメニューを提供している。また、三階は㈳鹿児島県特産品協会が主体になり、現在66社が約500点の工芸品、特産品を展示販売している。

「このような物産館は他県にもありますが、レストランのある施設はいまのところ当県だけでしょう。〝見て・触れて・感じてもらう〟ことがねらいで、実際、今まで感じたり考えてきたこととの違いも多く、いい勉強になっているようです」

三階の一角には広いオフィスのスペースがあり、ここでは都市と郷土との連携をはかりながら業務を行っている。

企業誘致課ではUターン・Iターン者の相談や斡旋、観光物産課では観光相談をはじめ同館の運営指導、また流通情報課では農政、林業等に関する首都圏の流通最新情報を郷土の関係方面へ提供していく。

「私たちの仕事はふるさとへの情報提供も大切な仕事で、いまパソコン等によるOAシステムを整備しているところです」と大石さん。3年間は東京で大忙しの日々を送る。

市町村のカタログやグラフ誌、スクリーンに映る屋久島の美しい風景などを見ているうちに近々ぜひ行きたいという気分になった。

●かごしま遊楽館／千代田区有楽町1-6-4千代田ビル☎03（3506）9177

琉球の香りと食のデパート
沖縄県産品ショップ「わした」

有楽町駅から銀座方面へ向って徒歩2分、外堀通りに面した出版社ビルの一階に沖縄県産品ショップ「わした」がある。京橋に近い場所柄、人通りは特に多いところではないが3本の地下鉄(銀座線、丸の内線、有楽町線)からも近く、ガラス張りの広いスペース（300㎡）が人目をひく。

名前の「わした」は、沖縄の言葉で〝私たち〟の意味。モノと人をつなぎ、私たちとコミュニティをはかりましょうと名付けたという。

正面入口から入ると、まずゴーヤー、ナーベラー(へちま)、パパイヤといった南の国らしい青果が目につく。手前には中国や琉球の影響を受けたという菓子や黒砂糖類、奥には沖縄を象徴するオリオンビールや泡盛などの酒製品、お茶・健康食品、沖縄の本や唄本などが豊富に並んでいる。また、中央の特設コ

「わした」の上地店長

銀座熊本館・佐伯広報経済課長

ーナーには紅型、久米島紬、焼き物、色鮮やかな漆器などの工芸品が上手に配列されている。

本州にはない沖縄ならではの物産が多く、まるで沖縄を旅しているような気持ちになり、ショッピングする楽しみにワクワクする。

「わした」は福岡市2店、北九州市についで昨年3月1日ここ銀座にオープンした。

運営は沖縄県の出資による三セク、㈱沖縄県物産公社。店長の上地哲さんは、

「県の出資もありましたが、運営は独立採算です。元をとるのに3年位かかるかなと思いましたが、一日平均1000名が来店してくれて売上げもまずまずですので、2年間で何とかなりそうです」と語る。

上地店長は沖縄読谷村の出身だが、大学の時上京して以来、流通方面で働いてきた。その実績と行動力が高く評価されている。

「お客さまはサラリーマン、特に20～30代のOLが多いですね。人気の商品は、ウッチンやハブ粉、ゴーヤー茶などの健康食品やウコンのお茶など。女性にはチンスコウなど沖縄独自の菓子類、男性には沖縄各地から取り寄せた泡盛、ビールも人気があります。

沖縄は世界一の長寿の国。自然を素材にした食品が多く、これらを都市の核家族や独身者でも買い求めやすいようコンパクトにセットし、パッケージや味にも新しい感覚を取り入れるようアドバイスをしています。

工芸品もペアや一個単位でも買い求められるような器や小物を中心に配置しています」

輸送費が日本一高いのが悩みだが、毎日新鮮な水産加工品や青果、花卉類が送られてくる。また、店内一角には観光センターがあり沖縄へのツアーを取り扱っている。

「土日曜日は試食会、花のプレゼント、琉球舞踊の披露などのイベントを行っています。地方からも訪ねてくれる人がいて店は普段より賑います。商品の説明を求められることが多いので大忙しです」

上地店長の次の夢は、大阪、名古屋、台湾にも「わした」ショップを開設すること。まだまだ知られていない沖縄のホスピタリティを全国各地で発信することだと語っていた。

●わした／中央区銀座1－3－9実業之日本社銀座ビル☎03（3535）6991

地方文化とふれあう銀座のオアシス「銀座熊本館」

銀座熊本館は日動画廊の隣り、自社ビル。下／1階物産コーナー、2階サロン兼イベントルーム。

外堀通りを新橋方面へ向いスキヤ橋交差点を渡ると左手に「銀座熊本館」と書かれた看板がある。日動画廊と軒を並べるレンガの格調あるビルで、銀座文化の一つのシンボル的存在。このビルの半分がもともと熊本県の所有であったことを知る人は少ない。

昭和21年に県が購入、現在1階から4階までを使用している。

1階は昨年10月にオープンした「くまもと観光物産プラザ」。物産展示販売コーナー、観光案内所等のほかに多彩なPR活動の場となる。2階は「くまもとサロン」。ゆったりしたスペースに椅子とテーブルがあるが、イベントやミニコンサート、絵画展等に使われる。3階は熊本県東京事務所、㈱熊

本県商品計画センター東京支社のオフィス部分、4階が県人会事務所になっている。

2階では時々展示会が開催され、8月には新たな〝い草ブランド〟のPRとして「座・畳展」が開催された。全国で8割の生産量を誇る県特産品のい草を使った都市生活者向きの展示会。続いて「夏目漱石と熊本展」が予定されている。

今年4月同館に赴任してきた広報経済課長佐伯和典さんにお話を伺った。

「漱石は松山が有名ですが、実は29歳の新婚時代を4年間熊本で英語教師として送り、『草枕』『二百十日』などを書いています。漱石を訪ねる熊本の旅なども企画中です。

銀座熊本館は自社ビルのメリットを生かし、銀座のど真中にあるくつろぎ、交流の場。一階に物産の展示販売所を設けましたが、販売が目的ではなく、熊本県をPRし親しんでもらう、グレードアップするのがねらいです。それでも一日300人以上が訪れ好評です」

二階では年間10本位のフェアやイベントを行っており、漱石の次は小泉八雲の予定。こは普段は県人の人が待合せ等にもよく利用し、夜は同窓会場にもなるという。

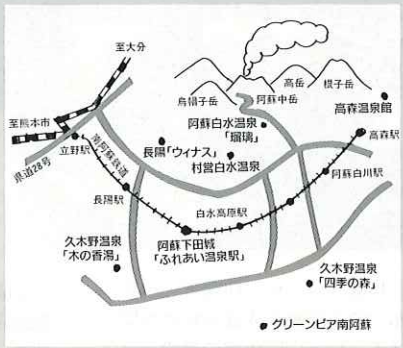
「東京へ来て感じることは、確かに情報が多いけれども、すべていい情報ではないこと。地方独自の文化や自然を大切にしながら洗練されたいいものを取り入れたいと思います」

その意図で開設された商品計画センターでは新たな物産開発に実績を上げており、プラザで見かけた商品はどれもセンスがよかった。

●銀座熊本館／中央区銀座5－3－16☎03（3572）5022

阿蘇山のふもとは温泉郷

南阿蘇・人気の公共温泉施設（市外局番☎09676）



世界屈指のカルデラ阿蘇の南半分を占める南阿蘇は、豊富な温泉源と美しい大自然を生かした温泉郷がいっぱい。歴史の古い温泉旅館に加えて、最近は公共の温泉センターが人気を呼んでいる。

●総合福祉温泉センター「ウィナス」（長陽村）

鳥が翼を広げて飛び立つような形をした多目的温泉施設。高齢者が利用しやすいよう手すりやスロープをつけている。サウナ、大浴場、ひのき風呂など種類も豊富。☎（7）2277

●久木野温泉「木の香湯」「四季の森」（久木野村）

「木の香湯」はその名の通り若木の香をいかした建物で、ロビーから見える阿蘇の雄大な姿が見事。大浴場、露天風呂、うたせ湯、サウナがあり、湯の香、木の香が楽しめる。☎（2）2332

「四季の森」はガラス張りの建物で、湯は素肌にやわらかい。阿蘇五岳が見渡せる景勝地。☎（7）2212

●グリーンピア南阿蘇温泉プラザ（久木野村）

クアハウスとして大浴場、露天風呂など7種以上の湯が楽しめる。目の前には阿蘇の大パノラマが広がり、湯につかりながら阿蘇見物に最適。☎（7）2131

●村営白水温泉（白木村）

三角屋根のユニークな建物内にほうたせ湯、ウェット湯などの設備が充実している。☎（2）2676

同村には〝現代の湯治場〟と名付けた施設「瑠璃」もある。露天風呂、家族風呂、サウナなどがあり、滝のある庭園を眺めながらのんびりくつろぎたい。☎（2）9999

●高森温泉館（高森町）

根子岳のふもとにある社寺造りの建物で、一階には大浴場やサウナ、露天風呂など、二階には休憩室、プレイルームがある。☎（2）2626

白水温泉「瑠璃」

麦飯石を使った大浴場
沢内バーデン（岩手県沢内村）

健康づくりをめざす沢内村では、保養・交流、研修施設「沢内バーデン」をオープン、ミニ・クアハウスとして人気を呼んでいる。

建物は鉄筋2階建て。1階には特活性石（麦飯石）を使って雑菌やにおいを吸着する清潔な大浴場、漢方ハーブの薬湯2種、サウナ、ジェット、打たせ湯などがあり、地下は談話室と研修室。2階はギャラリーとなっている。他村町の人も自由に利用でき入浴料は大人300円。

●沢内村企画調整課☎0197(85)2111

日本一の炭酸泉を核に
ドイツ風宿泊施設完成
（大分県直入町）

温泉の町直入町も最近は観光地として低迷していたが、大手入浴剤メーカーが調査したところ、長湯温泉の泉質は日本一と診断された。それをはげみに町おこしをスタート、研究者を集めたシンポジウム開催や先進地ドイツ見学等を経て、ドイツ風の宿泊施設と温泉棟を完成した。「ドイツ村」には15名まで収容できるコテージ4棟の他体育館、海洋センター、テニスコートなどがある。温泉は飲める〝飲泉〟としてアピールしていく。宿泊施設は1泊大人2000円。入浴料は6歳以上100円。

●直入町中央公民館☎0974-75-2240

人気の村営「小菅の湯」

週末は村の人口が倍に
村営「小菅の湯」大盛況
（山梨県小菅村）

平成6年夏に多摩川源流の山あいの里にオープンした村営「小菅の湯」は東京からも近いとあって、週末には入場制限が出るほどの盛況ぶりで、村の人口(1,144人)が倍になるほど。

平成3年にボーリングを開始、総事業費約5億5000万円かけて完成した施設は、村特産のヒノキやケヤキを贅沢に使った木造平屋建、250台収容の駐車場もある。館内ではおしゃれな室内着を着てくつろぐ。浴室はヒノキ風呂、打たせ湯、ジャクジー、サウナ、露天風呂などがあり、泉質はアルカリ性単純泉で肌がつるつるになることから〝美人の湯〟の別名も。レストランや近在の農家が持ち寄った無農薬野菜の青空市場も盛況で、特産のミネラルウォーター、ワサビ、コンニャクなどもよく売れて、村おこしに役立っている。入浴料／大人1日1300円、3時間900円。水曜日休み。☎0428(87)0888

温泉に浸かって森林浴
町営温泉「湯テルメ谷川」
（群馬県水上町）

上越線の水上駅より車で5分、スキー場でも有名な谷川温泉に4年前にオープンしたのが町営の温泉館「湯テルメ谷川」。ここの自慢はなんといっても露天風呂からの眺め。谷あいの斜面に位置し、クヌギやコナラなど周囲の樹木はそのまま生かし、人工的なものを一切排除している。さらなる特徴は温泉別に三つの内ち湯があること。地下300mから湧き出るアルカリ性単純泉、地下100mの単純温泉、地下50mのカルシウム・ナトリウム泉とそれぞれに泉質・効能が異なる。これも自然の豊かな証拠だろう。2階には食事などが持ち込み可能な休憩室があり、自由に利用できる。利用料金は大人500円。湯テルメ谷川☎0278(72)2619

爽快！お風呂をひとり占め
パーソナル露天風呂

家族風呂というのは温泉旅館に昔からよくあるが、狭いうえに景観もよくなく中身はイマイチだった。ところが最近は本格的な露天風呂をひとり占めできる〝パーソナル露天風呂〟を目玉にした旅館が出てきて人気を呼んでいる。

温泉美容研究家白井朝子さん推薦のパーソナル露天風呂は、まず九州別府温泉の「夢幻の里」。7つの露天風呂がすべて貸し切りで、泉質や大きさ、雰囲気もいろいろ。

お隣りの湯布院町では「夢想国」が家族露天風呂を開設。庭園も立派で、家族何人かがグループで利用するとよい。

川俣温泉（栃木県栗山村）の老舗「一柳閣」では、清流を望む場所にいくつかの露天風呂があるが、4、5人で利用すれば貸し切りで使用でき、料金も一般並み（1万5000円）。せせらぎの音を聞きながら贅沢な時間を満喫できる。

新潟県鷹の巣温泉の「喜久屋旅館」の場合は、8つの部屋すべてに内湯と露天風呂がついていて1人1泊2万円から。

露天風呂が普及してきた現在、パーソナル露天風呂は旅館やホテルの次なる目玉商品。人の目や時間を気にせず、誰も使っていない温泉に入る、この清潔感、爽快感が若い女性に人気とか。

露天風呂に入りながらSL見学
温泉のスタンド給湯も 「茶里夢の泉」（静岡県川根町）

●川根町企画商工課☎0547(53)3111

良質のお茶、SL・温泉で知られる川根町笹間渡温泉に新たな温泉源が見つかり、平成7年5月に公営浴場がオープンした。

町のマスコットキャラクターにちなみ「茶里夢（ちゃりむ）の泉」と名付けられ、男女別に露天風呂、内風呂がある。入浴しながらSL（蒸気機関車）を眺められるため、日曜日はSLファンにも人気。

「茶里夢の泉」横にはコイン式のスタンド給湯機があり、温泉湯を一回120ℓを限度に購入できる。コインは一枚20ℓ分50円、「茶里夢の泉」窓口で。

登山のあと露天風呂に入って休息

ブナ林の中に無料露天風呂も
大自然の湯治場「小谷温泉郷（おたり）」（長野県小谷村）

小谷村は信州と越後の県境にあり、折り重なる山々の中腹には歴史の古い温泉場が点在している。姫川沿いにある島温泉、来馬（くるま）温泉、下里瀬（くだりせ）温泉、土谷溪谷の奥にある奉納（ほうのう）温泉には30～50人収容できる宿が各一軒ずつ。さらに雨飾山麓には4軒の宿がある小谷温泉。昔から武士も湯治したという400年の歴史を持つ温泉地として知られ、最奥の町営雨飾荘からさらに徒歩5分のブナ林の中には無料（自由に賽銭）の男女別露天風呂がある。山越えするライダーや登山者たちに人気があり、かなり盛況だ。他に、JR平岩駅から徒歩5分ほどの便利な地には姫川温泉（宿5軒）もあり、大自然の中で温泉めぐりが満喫できる。

●小谷村観光連盟☎0261(82)2233

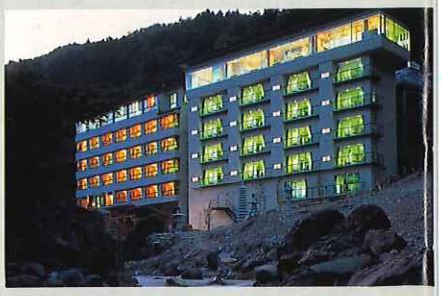
町営雨飾荘

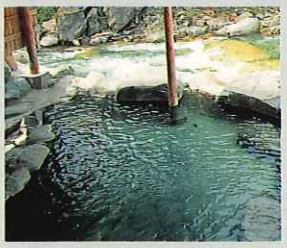
"山形最後の温泉"
舟形若アユ温泉（山形県舟形町）

山形県44市町村では舟形町を除いてすべてに温泉があり、温泉が悲願だった同町では「ふるさと創生資金」でボーリングを行ってきた。

その結果、地下1200mで47度の温泉を掘り当てた。町では"山形最後の温泉"をキャッチフレーズに、小国川と町の中心部を見下す山の中腹に和風の浴場を開設した。町のシンボル若アユをイメージした「舟形若アユ温泉」。近い将来、宿泊施設も作られる。

●舟形町役場農林課☎0233-32-2111





写真は川俣温泉「一柳閣」☎0288(96)0111

ゆとり・ふれあい、温泉コミュニケーション
——クアハウス坂井

隣町からやってきたという小学生4人は、10時の開館と同時に入館し、ウォータースライダーでスリルを楽しんだあとは25mプールで泳ぎ、それをもう10数回くり返している。

お母さん達は、かぶり湯、うたせ湯、気泡浴等をひと回りして、トレーニングルームでヘルスケア。「美しく健康になっていくのが目に見えるようで…」という主婦は、月1回は利用し、午後二、三時間をヘルスケアトレーナーの作ってくれたプログラムで運動する。

クアハウス坂井（長野県坂井町）は平日のせいか利用客は少なかったが、のんびりすごす人達の姿が三々五々。明るく清潔な施設内にはあふれる湯を使った11種の浴場があり、利用者は水着を着用している。温泉を利用した健康・スポーツ施設といったところだが、日本的な〝ひと風呂浴びる〟感覚も取り入れている村営施設。

利用料金は大人が1回1500円（小人700円）だが、一年間家族みんなが自由に利用できる5万円の「家族会員」券が好評で、活用をはかる目的もあって村民の大半が家族会員になっているという。

同施設は、姥捨山伝説で知られる冠着山を眼の前に望む見晴しの良い丘に建っており、クアハウスと隣接して宿泊施設「冠着荘」がある。

「どちらかというと、お年寄りは冠着荘でのんびり入浴・休憩、若い人や子供はクアハウスで身体を動かすという風に使いわけているようです」と指導員の山田さんは語る。

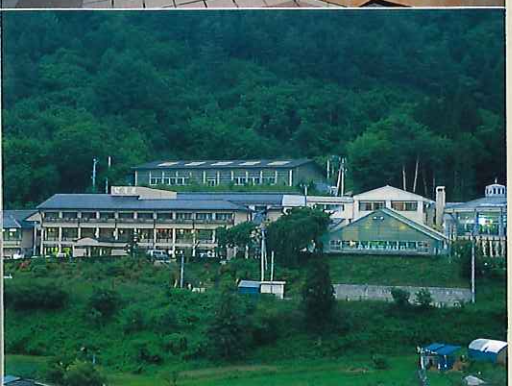
村では「ゆとり・ふれあいの温泉コミュニティセンター」として位置づけており、土日曜日はレストランや売店を含めて大賑いし、ちょっとした社交場に変身する。

長野県にはこのようなクアハウスが白馬村、野沢温泉村、丸子町にもあり、スキー客や温泉ツアー客と連動させるなどして特色を出している。

協会加盟のクアハウスは38カ所、20施設が自治体直営

クアハウス（KURHAUS）とは、ドイツ語で通常「多目的温泉保養館」と訳されている。KURは「保養・回復・治療」の意、HAUSは「建物」。

クアハウス発祥の地ドイツには、温泉の出る森林や海浜地に約200ヵ所のクアハウスがあり、家庭医等から病気や半健康と診断された人が、平均3週間位クアハウスに滞在し医師や理学療法師の指導を受けながら温泉療法を



クアハウス坂井の諸設備

受けたり、休養を楽しんだりしている。

日本でのクアハウス登場は、10数年前に遡る。ドイツの温泉保養施設に、日本古来の温泉医学、水治療法、温熱生理学、運動生理学といった現代科学を取り入れて開発されたシステム。厚生省が推進する「第二次国民健康づくり対策(アクティブ80ヘルスプラン)」の中で、温泉利用型健康増進施設として認定している背景もあり、自治体が積極的に対応、健康増進型町おこし施設として各地に開設された。

㈶日本健康開発財団の指導・管理のもとに開発・運営している日本クアハウス協会加盟のクアハウスは現在全国に38ヵ所ある。

これらの施設は、原則として入浴指導や運動指導をする専門スタッフを常駐させ、健康相談室等を設置することが定められている。

その中で自治体が直営しているクアハウスは現在20ヵ所。自治体が経営する場合は、既存のスポーツ、観光施設、名所等の周辺施設と連携をとりやすいことと、若者の雇用の場、産物の販売(土産コーナー)等により地域経済の活性化に役立つという利点がある。

日本健康開発財団では各地のクアハウスを温泉地活性型、地域活性型、宿泊施設活性型、リゾート中核型と分類しているが、地域活性型が最も多い。

利用料金は、大人が一回1000円から1500円と最も多く、小人(小学生以下)はその半額。施設を上手に活用してゆっくり楽しむ人にはお得だが、従来の〝ひと風呂浴びる〟程度の利用には高すぎ、お年寄りなど地域の人が気軽に利用する雰囲気はない。代って、企業等が活用するケースが増えている。

◀▼ルネッサンス棚倉

▶「野沢温泉アリーナ」の温泉プール
◀「温泉健康館ゆーゆ」（山形県小国町）

スポーツ・リゾートの一大拠点
――ルネッサンス棚倉

取材した「ルネッサンス棚倉」（福島県棚倉町）の場合は宿泊施設、スポーツ施設、クアハウスがセットされているため、会社や市民団体、学生等が一、二泊する場合が多い。

「従来の宴会型の温泉利用ではなく、ホテルに泊ってスポーツを楽しみ、クアハウスで体力チェックなどしながら健康増進に役立てるという方が増えています」とホテルサービス課長の生方浩志さんは語る。

リゾートスポーツプラザ「ルネッサンス棚倉」は約2万㎡の広大な丘の上に、ギリシャ建築をモチーフ（棚倉市は同じ北緯37度に位置するギリシャのスパルタ市と国際友好都市提携）にした400名収容のホテル、レストラン、クアハウスをはじめ、テニス場、乗馬場、アーチェリー、ゴルフ場、野球やサッカー等がたっぷりできる運動場、体育館等を備えた21世紀型の多目的施設。テニスや乗馬はアウトドアに加えてインドアのコートやコースも完備しており、これらの施設が一つの街を形成しているといった趣き。

クアハウスは厚生大臣健康増進施設の認定を受けており、2名のフィットネストレーナーが常駐、フィットネスやスイミングの教室が開催されている。

「ここの特色は、スポーツ関係の教室が各種行われ、初心者からベテランまで広く活用されていることでしょう。疾病のあと、温泉療養とトレーニングを取り入れてリハビリする方も増えています。私達指導員としても、病気やリハビリを必要とする人が長期滞在しながら療養・保養するドイツ型のクアハウスをめざしていきたいと思っています」とフィットネストレーナーの有我広さんは語る。

建物は町が作ったが運営は三セクの独立会社で職員は現在80名。利用者は年間60万人（うち宿泊者は6500人）を持続してきたが、昨年は景気低迷の影響を受けて50万人弱へと大幅に減った。利用者の6、7割が20、30代の若い人で、関東地区の人が7割を占める。

クアハウスは〝こころとからだの贅沢〟を満喫するには最高の施設だが、リッチな気分を味わうにはそれなりの料金と時間も必要である。

日本でクアハウスが定着するためには、若者を魅了するリゾート・スポーツ感覚に加えて、中高年者が健康増進施設として気軽に利用できることも大切で、今後は保健衛生、観光、生涯教育等と連携したソフト面の取り組みが求められるのではないかと思う。

自治体が経営するクアハウス

自治体直営施設	所在地・連絡先	浴場種類と併設施設など	スポーツ、ゲーム、周辺施設など
クアハウス屈斜路	北海道上川郡弟子屈町サワンチサップ3-5 ☎01548-3-2446	浴場10種（かぶり・うたせ・寝湯、歩行・気泡・全身・部分・運動・圧注浴、箱蒸し）、トレーニングルーム	テニス、トリム、森林浴、キャンプ ゲートボール、カヌー
夏油（げとう）温泉館	岩手県北上市和賀町岩崎新田字畑入山1-1 ☎0197-67-3966	浴場７種（かぶり・うたせ湯、歩行・気泡・全身・部分・圧注湯）	キャンプ、ゲートボール、森林浴 スキー、露天風呂
クアハウス碁点（ごてん）	山形県村山市碁点1034-7 ☎0237-56-3351	浴場11種（かぶり・うたせ・寝湯、歩行・気泡・トゴール・全身・部分・渦流・圧注浴・箱蒸し）	テニス、ゲートボール、サイクリング SPA、遊歩道、体育館、つり橋
クアハウス棚倉	福島県東白川郡棚倉町大字関口一本松 ☎0247-33-4111	浴場９種（かぶり・うたせ・寝湯、トゴール・全身・部分・気泡・圧注湯、箱蒸し）、トレーニングルーム、プールなど	テニス、ゲートボール、アーチェリー 乗馬、ゴルフ、プール、ホテルなど
クアハウス津南	新潟県中魚沼郡津南町小下里 ☎0257-65-3711	浴場９種（かぶり・うたせ・寝湯、トゴール・全身・部分・気泡・圧注浴、箱蒸し）、トレーニングルーム、プールなど	テニス、サイクリング、総合グラウンド、森林浴
クアハウスたいない	新潟県北蒲原郡黒川村下赤谷 ☎0254-47-2660	浴場９種（かかり・かぶり・うたせ・寝湯、全身・半身・気泡・圧注浴、箱蒸し）、トレーニングルーム、プールなど	テニス、スキー、体育館、グラウンド 遊園地、国民宿舎
白馬村国民保養センター	長野県北安曇郡白馬村北城265-38 ☎0261-72-4832	気泡・トゴール浴、超音波・薬湯、サウナ、レストランなど	テニス、キャンプ、クロスカントリー フィールドアスレチック、他
クアハウスのざわ	長野県下高井郡野沢温泉村豊郷3734 ☎0269-85-3184	浴場９種（かぶり・うたせ・寝湯、歩行・気泡・全身・部分・圧注浴、箱蒸し）、トレーニングルーム、露天風呂など	テニス、森林浴、キャンプ、体育館 グラウンド、博物館、おぼろ月夜の館
クアハウスかけゆ	長野県小県郡丸子町大字西内1293 ☎0268-44-2131	浴場９種（かぶり・うたせ・寝湯、歩行・気泡・全身・圧注浴、箱蒸し）、飲泉、健康管理室、プール、多目的ホールなど	温泉プール、森林浴、トリム、鹿教湯 総合病院、リハビリセンター研究所
クアハウス坂井	長野県東筑摩郡坂井村道平 ☎0263-67-3000	浴場11種（かぶり・うたせ・寝湯、歩行・圧注・圧注気泡・運動・低温浴、箱蒸し）、飲泉、サウナ、ソラリウムなど	テニス、ゲートボール、バーベキュー、 体育館、遊歩道
クアハウス九谷	石川県能美郡寺井町泉台東10 ☎0761-58-5050	浴場９種（かぶり・うたせ・寝湯、歩行・圧注・気泡・運動・全身浴、箱蒸し）、飲泉、赤外線・ミストサウナ、プール	テニス、九谷焼資料館・即売団地、遊園地
クアハウス岩滝	京都府与謝郡岩滝町字岩滝470 ☎0772-46-3500	浴場11種（かかり・うたせ・寝湯、全身・半身・渦流・気泡・圧注気泡・トゴール・アロマ浴、箱蒸し）	テニス、ゲートボール、体育館、武道 館、遊歩道、グラウンド
クアハウス熊野本宮（ほんぐう）	和歌山県東牟婁郡本宮町渡瀬45-1 ☎07354-2-1777	浴場11種（かぶり・うたせ・寝湯、全身・部分・圧注・気泡・蒸気浴、箱蒸し）、飲泉、トレーニングルーム、健康相談室など	テニス、キャンプ、温泉プール、トリム、遊歩道、バンガロー
クアハウス湖陵	島根県簸川郡湖陵町二部1230 ☎0853-43-2266	浴場９種（かぶり・うたせ・寝湯、歩行・全身・部分・気泡・トゴール浴、箱蒸し）、サウナ、ボディシャワー、プールなど	テニス、野球、国民宿舎
クアハウス・クアタラソさぬき津田	香川県大川郡津田町鶴羽4-2 ☎0879-42-5888	浴場11種（かぶり・うたせ・寝湯、歩行・全身・部分・気泡・圧注・低温・トゴール浴・箱蒸し）、海水露天風呂、サウナなど	ボートセーリング、カヌー、海水浴、 国民宿舎、海気浴
クアハウス今治	愛媛県今治市湯ノ浦36 ☎0898-47-0606	浴場16種（かぶり・うたせ・寝湯、蒸気・低温・全身・部分・気泡・圧注・吸入・足・歩行・露天・運動・噴出浴、箱蒸し）	テニス、フィールドアスレチック、遊 歩道、グラウンド、ホテル、日本庭園
湯都ピア浜脇	大分県別府市浜脇1-8-20 ☎0977-25-8118	浴場９種（かぶり・うたせ・寝湯、運動・歩行・全身・圧注・気泡・箱蒸し）、トレーニングルームなど	体育館、研修・会議室
クアハウス日南	宮崎県日南市大字風田字柿内3200 ☎0987-24-0667	浴場９種（かぶり・うたせ・寝湯、運動・全身・部分・気泡・圧注浴、箱蒸し）、体育館、研修室など	テニス、ゲートボール、ホテル
クアハウス栃尾又	新潟県北魚沼郡湯之谷村栃尾又温泉 ☎02579-5-2211	浴場６種（かぶり・寝湯、全身・部分・気泡・圧注浴）、トレーニングルーム、マッサージ室	テニス、ゲートボール、スキー、森林 浴、釣り
クアハウス白川郷	岐阜県大野郡白川村平瀬 ☎05769-5-2314	浴場９種（かぶり・うたせ・寝湯、歩行・全身・部分・気泡・圧注浴、箱蒸し）、温水プール、トレーニングルーム	テニス、ゲートボール、トリム、森林 浴、スキー、グラウンド

お知らせ

全国過疎問題シンポジウム

（新潟県佐渡郡佐和田町）

■テーマ

「近き者よろこび、遠き者来るまちづくり」

■日程と主な内容

●10月19日（木）基調講演

石山修武（早稲田大学理工学部教授）

●10月20日（金）

▽第1分科会（両津市）

「あなたが主役～高齢者パワーの発揮のために」

▽第2分科会（相川町）

「田舎暮らしの勧め～UIJターンの促進のために」

▽第3分科会（佐和田町）

「地域間交流～ふれあいとにぎわいのために」

過疎地域活性化ビデオ「広がれ ふれあいの輪」

［VHS30分カラー　完成！］

高知県檮原町、新潟県高柳町、群馬県川場村の独自の個性を生かした交流によるまちづくりを紹介します。お問い合せは全国過疎地域活性化連盟へ。

編集後記

▼今回の〝温泉による地域おこし〟特集では、全国各地にある温泉地の中で、どこを紹介するかで思い悩んだ。魅力ある温泉地は数多く、北海道、北陸、中国、四国地区については、いずれかの機会にまた取り上げさせてもらいたいと思う。（A）

▼湯布院の取材では、大分空港から熊本空港までレンタカーを飛ばして地図上の温泉地すべてを回った。40円の町営浴場や湯治のための冷泉など、「観光」ではくくれない温泉の形と魅力を実感。二泊三日の行程で入浴回数のべ20回、湯ただれしながらの充実した取材であった。（S）

De POLA［でぽら］
No.9（'95秋冬号）

発行日／平成７年９月15日
発行所／全国過疎地域活性化連盟
〒105 東京都港区虎ノ門1-1-24
オカモトヤビル8階 ☎03（3580）3070㈹
編集協力・印刷／㈱ぎょうせい
■協力／（財）地域活性化センター

でぽら No.9
平成7年9月15日発行
発行／全国過疎地域活性化連盟 〒105東京都港区虎の門1-1-24 オカモトヤビル8階 ☎03(3580)3070代

しあわせ顔は、宝くじピープルの証し。

街にあふれる、しあわせ顔の人たちの中に、「宝くじピープル」が多くいます。宝くじは半世紀あまり、みなさんに夢をプレゼントしてきました。これからも宝くじスマイルが、とびかう!ッポンにしたいなと考えています。どうぞよろしく。

宝くじ
財団法人日本宝くじ協会

本誌は、財団法人日本宝くじ協会の助成を受けて作成したものです